

カズウィーニー 『被造物の驚異と万物の珍奇』における天使論 ーワースイト写本に即してー

岡 崎 桂 二

1. 問題の所在

天使 (malak, (pl.) malā'ika) はイスラーム信仰において中核に位置する¹⁾。すなわち、「使徒ならびに信者たちは主より下されたものを信じる。一人一人が神と諸天使と啓典ともろもろの使徒を信ずる」(2-285、177、4-136)とあり、来世、定命を加えたこれら6つの信奉がイスラーム信仰の柱 ('aqā'id) とされている²⁾。それゆえ天使の存在を否定することは、直ちに不信仰 (kufr) と見なされる。(3-90) このことはイスラームの非寛容の事例として広く知られているアブー・ザイド氏排斥事件が示すところである。エジプトの破棄院は、氏の『コーラン』解釈法を問題視するとともに、氏が精霊 (ジン) の存在を否定したことを以って、彼のムスリムであるとの主張を斥けたのである³⁾。

また、ジブリール (ガブリエル) やミーカーイル (ミカエル) の呼称が示すキリスト教とイスラームの親縁関係にもかかわらず、イスラーム信仰における天使の重視は、三位一体説により神の子、イエスの存在が強調され、必然的に天使の役割が縮小したキリスト教と対称をなす⁴⁾。夙にルターやカルヴァンは天使の存在を否定し、その信仰を戒めている⁵⁾。

このようにイスラーム信仰において枢要な位置を占める天使は、創造⁶⁾、啓示⁷⁾、終末⁸⁾、という宗教の核心的事象に関与し、さらに預言者、ムハンマドの軍勢に加勢して敵に勝利し⁹⁾、また預言者を導いて昇天し、神に相まみえた¹⁰⁾。そして人間の全ての行動は天使によって神に報告され、その記録 (帳簿) に基づいて最後の審判が下される¹¹⁾。また、「人間の本质は天使との比較において規定され、その逆もまた行われている」、のである。この意味において、天使と人間、あるいは預言者、の優劣が常に問われてきた¹²⁾。

つまり、ムスリムは天使を介して自己を認識し、宇宙を感得し、神の本質を理解できるのである。しかし、その認識、感得、理解へと到るまでには、天使の身体性、組成、役割、位階、等さまざまな疑問を解決する必要がある。そして根源的な「宇宙は天使無しで存在できるのか」という究極の問いに答えを出さなければならない¹³⁾。

その天使の本質、組成、権能の理解は、『コーラン』を主に¹⁴⁾、その他ハディース (ムハンマド言行録)、タフシール (コーラン注釈書)、ターリーフ (歴史書) に基づくが、それらの曖昧で矛盾した記述から想像力を発揮する余地があり、後世、「コーラン注釈書」に見られるように根本史料に様々な変形、付加、潤色、が施され、天使像が肥大した¹⁵⁾。また、諸種の伝承

や史料における天使、霊 (rūh)、靈魂 (nafs)、の各語の異同、不一致も天使像の多様性をもたらしている¹⁶⁾。

さらに天使は哲学、イスラーム神秘主義 (スーフィズム)、においても主要なテーマとして論じられてきており、特に宇宙の創造、諸物の位階を問う宇宙論において天使は中心に位置する。

つまり、宇宙、すなわち天上界と地上界を包含する世界、がどのような構造、組成、階層を成しているかを問う宇宙論において、天使、あるいは人間の存在が問われたのである¹⁷⁾。それゆえ、神学者、哲学者のみならず神秘主義者 (スーフィー) たちが独自の宇宙論、天使論を構築しており、スーフィーたちは特に神の命令に背いたイブリースに注目している¹⁸⁾。

イスラームにおける宇宙論の源泉は『コーラン』であり、そこでは創造主 (神、アッラー) が天地を6日間で創造し、それらは7層をなし、(7-54、10-3~6、11-7、23-86、65-12、78-12) その最高天上の第九天に天使の支える神の玉座と第八天上にその脚台があるとされる¹⁹⁾。最上天 (第7天) には常に神を賛美し、信者への赦しを求め続ける天使がいる。そして最下天 (月下界) は太陽、月、星の光が輝き、その大地の支配は人間に託されているが、そこはまたジンの棲家でもあり彼らは天上の会話を盗み聞きしようとしている²⁰⁾。

カズウィーニー『驚異』においてもこの伝統的な宇宙観が採用されている²¹⁾。そして、7つの天球、すなわち惑星と、その上方にある至高天との境界上には境の聖木があり、天国への入り口を示す²²⁾。そしてカルービューン (ケルビム)²³⁾ を最高位に位階をなす天使たちは、通常至高天に住み神の周りを飛行しているが、地上界に降りてくるものもあるとされている²⁴⁾。この『コーラン』やハディースから導き出された不可視で精神的な存在は、さらに、神学や哲学における精緻な宇宙論の中にその位置を占めることとなる。

また天使は壮大な宇宙論の主要テーマであるばかりか、民間信仰においてもその位置を占めており、特に、ジャーヒリーヤ期以来のジン、グール、シャイターン、という天使と親縁関係にあり、所謂妖魔的存在に対する信仰、畏怖は根強く残り、現代にまで受け継がれている²⁵⁾。

このように天使は信仰、思想、哲学、神学、宇宙論、民間信仰、等広範囲の考察の対象となっているが、そこに「イスラーム天使論」と概括できる統一的な天使像、天使論はない。イスラーム世界には多様な天使像で溢れ、いわば天使論が百花繚乱であると評せよう²⁶⁾。

このような錯綜した状況下、イスラーム天使論研究においても長く包括的な専著はなく、漸く2012年にBurgeの著作が出されたのみである。しかし、この著作はスユートイー (1505年没) の「ハディース集」の天使の項の翻訳、分析を主とし、イスラーム天使論の基本書ではあるが、多様な資料をまとめ、ムスリムの天使像形成に多大の影響を及ぼした著作の検討という本稿とは、その目的を異にする。また日本語著作では、竹下がその概観を記し、中村、青柳が宇宙論の一環として天使を扱っている²⁷⁾。

本稿はこのような天使論研究の状況に鑑みて、多くの資料をまとめて客観的な天使像を描き、広い読者層に浸透し、挿絵とともに後世に多大の影響を与えたカズウィーニーの『被造物の驚異と万物の珍奇 ('Aja'ib al-Makhlūqāt wa-Gharā'ib al-Mawjūdāt)』(以下『驚異』と略す) 中の天使像を紹介し、その意義を分析しようとするものである。この試みは、わが国では未だ本格的

な天使論は書かれていない現状において、「イスラーム天使論」研究の一助となると希望する。カズウィーニーは『驚異』と地理書『諸国の遺跡と信者の情報』で名高く、この2書は合わせてWüstenfeldによって「宇宙誌 (Kosmographie)」と命名され、天地間の一切を取り上げ、それらを神の顕現と見る著作ジャンルの代表者と見なされている。

トゥースイー (1067年没) は既に同名の『被造物の驚異と万物の珍奇』と題する著作をペルシャ語で物しており、カズウィーニーはこの百科全書的著作から多大の引用を行い、影響の大きさが夙に指摘されている。しかし、カズウィーニーの著作はその精緻な体系性と網羅性により、後世の読者への浸透、読者層の広汎さという点でトゥースイーのそれを凌駕していたと判断できるであろう。残存する写本の数やその多様性がこの事を表している²⁸⁾。

カズウィーニーの『驚異』は各地に残存する写本数が多いという特徴から、これまで信頼に足る校訂本が無かったが、近年、カズウィーニー生存時に彼の居住地であるワースイトで筆写された写本が、収蔵先のミュンヘンのバイエルン国立図書館によりデジタル化され、広く研究に資することになった。この原著者カズウィーニーの旧蔵本ではなかったかとも推測されているワースイト写本は、その筆者の生存時という年代、良好な保存状態と合わせて最も信頼に足る原典と見なしうるであろう。さらに、この写本には467枚の絵画が挿入されており、天使という不可視の存在が、同時代にはどのように想像し、理解されていたのかを如実に示す資料ともなっている。本稿もこのような幾多の利点を持つワースイト写本を基として論じる²⁹⁾。

2. 天使論資料

先述のように、イスラーム天使論の史料は根本史料である『コーラン』やハディース³⁰⁾、それらに基づくタフシール³¹⁾、ターリーフ³²⁾、さらに「諸預言者伝 (qīṣaṣ anbiyāʾ)」があり、さらに哲学者や神学者、神秘主義者 (スーフィー) の著作が挙げられる。

イブン・スィナー (1037年没) は流出論に基づく知性の生成と関連付けて天使を論じ、その位階を明らかにした³³⁾。彼の説はガザリー (1111年没)³⁴⁾ やイブン・アラビー (1240年没) を代表とする様々の神学者が反駁したり、改変されて受容されたりした³⁵⁾。わけても照明学派の鼻祖、スフラワルディー (1191年没) は事物の本質を光とし、その内面の実体こそ天使であるとする独創的な説をたてた³⁶⁾。「純正同胞団 (イフワーン・アッサファール)」はその百科事典的著作で新プラトンの流出論に基づく独自の天使論を展開した³⁷⁾。

他方、スューティー (1505年没) は天使に関するハディースを主題別に整理した『天使伝承配列 (al-Ḥabāʾik fī akhbār al-malāʾik)』を著わし、そこで取り上げられているハディースは『驚異』と共通するものも多い。これにはバージの翻訳、紹介がある³⁸⁾。

また、マクディスィー (生没年不明) らの歴史家達は万物の起源から歴史を書き起こし、天の書版や筆、玉座や脚台を記述し、天使の創造に書き及ぶ³⁹⁾。さらに、ダンテ『神曲』に影響を与えたとされているマッリー (1058年没) 『赦しの書簡』も天使論としての重要性を持つ。特に冥界巡りという著述形式は、預言者ムハンマドの「夜の旅」と「昇天物語」と並んで、イスラームにおける天使像形成に多大の影響を及ぼした。また『赦しの書簡』中にはジンが作ったとされている詩 (カスィーダ) が挿入されているのも注目される⁴⁰⁾。

これらの多様な著作にあって、カズウィーニー『驚異』は、知識の整理や教育を目的とする「百科全書」的著作とみなされており、その体系的、簡潔な著述、先行文献の整理、とりわけ、挿入されている絵画、によって広範囲な読者を確保し、イスラーム天使論の原型（プロトタイプ）とされ、天使像の確立と伝播に大いに寄与した⁴¹⁾。

（翻訳においては神や預言者等に付与される賞讃句を省略した。また訳文中のカッコ内表現は、『コーラン』の引用箇所、アラビア語転写、あるいは意味を通り易くするための補足である。また天使名も通称のガブリエル、ミカエルとせずに、アラビア語原音のジブリール、ミーカーイールと音写する。その他の天使名も同様）。

3-1. カズウィーニー『被造物の驚異と万物の珍奇』

カズウィーニーはその名が示す通りカズウィーン（テヘラン西北）生まれだが、モンゴルの侵攻に際して西方に遁れ、モースルで法学、哲学を中心とする教育を受け、哲学、天文学において高名なアブハリー（1265年没）の薫陶を得た。また、アラビア語修辞論で名高いイブン・アシール（1239年没）にも教えを受けた。さらにワースイトに移り、当地で長く裁判官（カーディー）を務めた。ワースイト（al-Wāṣit, 中間の意）はその名のごとくチグリス河沿いのクーファとバスラの中心に位置する町で、繁栄していたが、バグダードが陥落した1258年に、モンゴル軍により同じく陥落した。カズウィーニーはさらにヒッラでもカーディー職に就いていたが、ワースイトのシャラービーヤ学院（al-Madrasa al-Sharābiyya）で教鞭を執った⁴²⁾。

カズウィーニー（Zakariyya b. Muḥammad b. Maḥmūd Abū Yahyā' al-Qazwīnī）の主著は『諸国の遺跡と信者の情報』と『驚異』の2作であるが、前者は地理学の、後者は宇宙論という著作ジャンルの代表作として評価されている。また両著ともに地理情報や森羅万象にわたる膨大な情報を体系づけ、アルファベット順に配置し、読者の便宜に配慮した「百科全書」と見なされている⁴³⁾。

この体系的なイスラーム天使論に関するスューティーの『配列』と比較するとより鮮明になる。天使に関するハディースを集成した『配列』は、「コーラン注釈書」に特徴的な意見の並列という編纂方法を採用し、時に矛盾する内容であってもそれを調整したり、自説を述べるのではなく、諸説を並置し、読者にその解釈を任せる編集法を取る。

他方、『驚異』では、編纂者（カズウィーニー）が諸説を調整し、矛盾や破綻の無い体系的性を維持した行文を導く⁴⁴⁾。このようなカズウィーニーの著述法、編纂法をBergeは「短縮化 verkürzung」と名付ける。『驚異』における「短縮法」はミーカーイールの翼の叙述に顕著に現れている⁴⁵⁾。

Heesによれば『驚異』はドイツ国内だけでも20種の挿絵付き写本が確認されている⁴⁶⁾。刊本としては7種の写本に基づくWüstenfeldのものが知られているが、現在では校訂の不十分さが指摘されている。

しかし、近年カズウィーニーの生存時の1280年筆記で、カズウィーニーの周辺者、おそらく学問的弟子、に帰すワースイト（ミュンフェン）写本が明らかにされ、von Hees（2002年）や Berlekamp（2011年）の研究が著されている。この写本は現在ミュンフェンのバイエルン国立

図書館（Bayerische Staatsbibliothek）に収められている（Cod. arab. 464）が⁴⁷⁾、豪華な挿絵が467枚挿入されており、当時ワースイトには「ワースイト派」と称すべき画家集団を指摘する研究者もいる⁴⁸⁾。

同写本は医師（al-Mutaṭṭabbib）のMuhammad M. ibn ‘Alī ad-Dimashqī がイスラーム暦678年シャッワール月24日（西暦1280年2月27日）に筆写を終えたもので、ナスヒー体で書かれた27行から成る213葉で構成されている⁴⁹⁾。

訳本としてはWüstenfeld本に基づくEthéの独訳（1868年）が有名であるが、その後、同じくWüstenfeld本に依るGieseの独訳（1986年）が刊行された。さらにvon Heesは動物と天使の項に関して、ワースイト写本に基づいて校訂を施し、それに依拠する独訳を発表した。本稿においてもこれらの独訳を随時利用した。

本稿はワースイト写本を基に、von Heesの校訂を参照したが、そこで省略されている部分はal-Faqqīとal-Azhari校訂のアレクサンドリア版を参考にした⁵⁰⁾。また2011年にはBerlekampがワースイト写本に基づいて『驚異』を図像学の見地から論じている。

『驚異』は「宇宙誌」の通称で知られるごとく、天上界、地上界の諸物、諸現象が扱われており、その宇宙認識はイスラームに伝統的な7層の天界像に基づく。『驚異』はこの宇宙像に基づき2部に分かれており、第1部は不可視界（天上界）を扱い、星辰や時間論に続いて天使論がここで扱われており、さらに、風、雨、等の自然界の現象も取り上げられている。第2部は可視界（地上界）を扱い、4元素の説明で始まり、以後、人間（人体）、動物、植物、鉱物、に関し、各項目がアルファベット順に説明される。最後に両性具有、獣面人、等の不可思議な存在が描かれ、各天使の着衣と形状の説明の後にゴグとマゴグが記されている⁵¹⁾。

3-2. 語義

『驚異』は表題に含まれる「驚異（‘ajā’ib）」「被造物（makhlūqāt）」「珍奇（gharā’ib）」「諸物・存在物（mawjūdāt）」の意味を説明する序文を冒頭に置く⁵²⁾。

「驚異」の説明は表題の「驚異、‘ajīb, ‘ajā’ib」ではなく、「驚嘆、‘ajab」の語の解説で始められ、「原因不明のものや慣習に反するものを目撃した時の『驚き当惑の感情（hayra）』である」とし、具体的にはシンメトリカルで完璧な6角形を成すハチの巣を見たときに呼び起こされる感情（hawās ghariba）と解説する⁵³⁾。この説明は「哲学は驚きに始まる」とするソクラテスやのアリストテレスの言を想起させる⁵⁴⁾。ひとは天体や自然の不思議な現象を初めて経験した時には、驚き当惑するが、見慣れてなじむ深くなると当初の感情を失い、諸物、諸現象に神の顕現、徴（アーヤ）があるのを忘れてしまう。（13-4）⁵⁵⁾ それゆえ、カズウィーニーは警告を発して、ひとはつねに『「天と地にあるものを見よ』。しかし、みしるしも警告も信じない民にはなんの役にもたたない』（10-101）と『コーラン』を引く。

そしてこの定義に基づいて著されている『驚異』には、今日、見慣れているありふれた可視的現象の虹、雷、等の自然現象が多く扱われている。また467枚の挿絵の多くは樹木や植物を扱っている⁵⁶⁾。つまり、カズウィーニーにとって驚異とは神の創造物一切を指し、そこに神の支配、徴、奇蹟を見出すのである。この点が、「驚異」の同意語とされる「珍奇」との相違点である。

後述のように、珍奇は何より事物の稀少性に重点が置かれている。

「被造物」は神を除く一切の生物、事物を指す。そして被造物はそれ自体で自立しているもの (qā'im bi-dhāt) と他物に包摂されるもの (qā'im bi-ghayr) に二分される。前者は空間を占めるもの (mutahayyiz) と、そうでないものにさらに分けられ、空間を占めるものは身体 (jism) である。そして非空間的なものは霊的な実体 (al-jawhar al-rūhānī) であり、これらは身体に宿ってこれを統御する魂 (nafs) とそうでないものがあり、後者は欲望や怒りから免れている天使 (al-malak) と欲望や怒りに駆られるジン (al-jinn) とに分けられると説明する。

そして天地万物は神の創造したものであり、「神こそは、七つの天を創造し、また大地からも同数のものを創造したもうたお方である」(65-12) を引用する。そして神はまず「火球」ついで「気球」、さらに「水球」、最後に「土球」を作り、これら4種が各々混合して、火と空気、空気と水、水と土、の3層をなすと説明する。

「珍奇」とは希少で、既知の事実に反し、見慣れた物と相違を来とし、驚きをもたらすものとする⁵⁷⁾。そしてその原因に強力な魂 (nafs)、天体、元素の影響を挙げる。そして珍奇の最たるものとして、月が割れたこと、杖が蛇に変わったこと、海が真っ二つに分かれたこと、蘇生等の、諸預言者の奇蹟 (mu'jizāt) を例として列挙する⁵⁸⁾。また諸聖者 (al-awliyyā) が起こした奇跡 (karāmāt) を挙げ、祈願による病氣快癒、雨乞いによる降雨、また地震、月食、雷等の自然現象をも取り上げる。

そして鉄を引き付ける磁石 (al-magnāṭis) を珍奇の例として挙げ、珍奇は驚異と重なる面があるが、前者は何よりその稀少性に重点が置かれていると説明する。さらに珍奇は自然現象を含む「万物」が対象とされ、それゆえ、ジャーヒズや高名な天文学者のアブー・マーシャルを引いて、病氣快癒、異常気象、夢解釈、湖の干上がり、地震、等が珍奇の例として挙げられているのである。

「万物」とは一切の被造物であり、原子で成り立っているか偶有 ('arād) によるかの何れかであり⁵⁹⁾、それらはさらに、人知では計れない未知の物と、理解可能であるがその細部に亘る詳細については知られていない物 (天上界の事物) に二分することができるとする。

万物は肉眼で目視できるものとできないものに分けられるが、後者には玉座 (al-'arsh)、脚台 (al-kursi)、天使、ジン、シャイターンが含まれると説明する。そして万物は、各々種 (jins)、類 (naw'), 項 (sinf)、目 (qism) に下位分類できるとする⁶⁰⁾。そして万物の動きには神の叡智が宿り、その数は時には二つ、またある時には10、さらに千に及ぶことがあると説き、このことは神の唯一性 (al-wahdāniyya)⁶¹⁾、その全能性、偉大性を示すものであると説明する。

このように、カズウィーニーは表題が示す各語の説明において、あらゆる自然現象や森羅万象は神の偉大さ、全能性の徴であるとする世界観、自然認識を明言し、この事実読者に読者の注意を喚起したいとする著作目的を表明する。

カズウィーニーはこのような世界観、自然認識、著作意図に基づいて天使を考察する。

3-3. 翻 訳

『驚異』の天使論は「天上の居住者」で始められる。

A. 天上界の居住者 (sukkān al-samawāt)

天界 (al-samawāt) の住民は天使 (malā'ika) である。人びとの述べるところによれば、天使は単純な原子 (jawhar basīṭ) から成り⁶²⁾、生命を有し、知的言語能力 (nataq 'aqli) を持つ⁶³⁾。また、天使、シャイターン、ジンの相違は実際のところ類 (naw') における相違に他ならない。また、その3者の相違は偶有における相違であって、完全か不完全であるか、あるいは、善か悪か、の違いであると主張する者もいる。

天使は聖なる本質 (jawāhir muqaddas) であり、怒りによる暗黒や欲望による混濁から免れていることを知れ⁶⁴⁾。(『コーラン』には)「(激しく怖い天使は) 神のご命令に背かず、命ぜられたとおりのことをそのまま実行に移すぞ」(66章6節) (と説かれている)。

天使たちの食べ物(は)は賛美 (tasbih) であり、聖化 (taqdīs) がその飲み物であり⁶⁵⁾、その楽しみは至高の神を祈念 (dhikr) することであり、神に仕える ('ibāda) のを喜びとしている。

至高の神は天使を様々な姿にお作りになり、異なった運命 (qadar) をお与えになった。というのも、被造物を正しく整え、天上界における神への崇拝を完璧にするためである。

預言者は、「天空は騒然(ぎしぎしと)と音を立てているが、何と見事に秩序立てられていることよ。指と指の間にさえ跪いたり額ずいたりしている天使がいる」、と述べた⁶⁶⁾。

また賢者たち (hukamā') は、「広大な天地間にはいかなる被造物も無かった。しかし創造主の知恵はその空間を荒涼で無住のままにはしておかれなかった⁶⁷⁾。神は暗黒で塩辛い深海を無住になさらずに、多様な生物を創造された。また、繊細な大空を無住のままにはされずに諸種の鳥類をお造りになり、(それらはあたかも) 海中の魚のごとく空中を浮遊する。さらに、干からびた大地や林、山々を無住にせずに、猛獣や野生の獣を造られた。そして、暗黒の大地を無住にせず、諸種の蠕虫や昆虫をお造りになった。」、と言う。

また、月下界の生き物の種類については、天界の創造物に似ていて、それはちょうど壁に描かれた絵や彫刻が生き物に似ているようなものだ、という者もいる⁶⁸⁾。

一方、天使の種類については、創造主しかご存知ではない。主は「主の軍勢は主のみが知り給う」(74-31) と述べられた。しかしながら、法の支配者(預言者、ṣāhib al-shar') にはその幾つかを教えたまう。また、諸現象を介して知恵を働かせた結果、分かるところもある。そうしてたとえ小さなアリにも何らかの天使が託されており、また、一滴の雨粒にも天使が宿り、雲から下ってきて、神の定めた場所に落ちる。これが昆虫や雨粒の実態である。(そうでなければ) 天体、星辰、空気、雲、風、雨、山、海、泉、川、鉱山、植物、動物、を一体、どのように考えたらよいのか⁶⁹⁾。

天使は全能の主の御力を通して、この世界を公正なものとし、存在する一切を完璧にし、諸物を完全なものとする。全知全能の主は「天と地にあるもので、たとえ虫けらのように小さいものであっても、見知らぬものはない」(10-61) と言われた。

天使に関しては、既に述べたように法の支配者の伝える事実か、あるいは知恵を働かせるかによってのみ、知ることができる。以下に法の支配者が天使についてお伝えになったことを述べる。

B. 玉座の護持者 (hamla al-'arsh)

天界の住民の中に至高至大の神の玉座の護持者がいる。それらは最強で最も気高い天使である。他の天使たちがこぞって近づいてきては挨拶し、至高の神の側近くで仕えている故にかれらの許を行き来する。「玉座を支える者や玉座の周囲にいる者たちは」、主の栄光を讃え、主を信じ、信者たちのために赦しを乞う」、(と『コーラン』40章7節、に書かれている)。

ある伝承情報 (khabar) によると、彼らの中には人間 (bashar) の姿をした者や、雄牛 (thawr)、あるいは鷲 (nasr)、さらにまた獅子 (asad) の姿を取る者がいるとのことである⁷⁰⁾。

至高の神の預言者はウマイヤ・ブヌ・アビー・サルトの詩を聞いた時、詩人がその4者を一まとめにして詠んだので驚かれた⁷¹⁾。それはイスラーム勃興以前 (jāhiliyya) のことである。その詩というのは、「男の右の足元には人間と雄牛が、左の足元には鷲と強大な獅子がいた」というものである。

イブン・アッバースによれば⁷²⁾、神は玉座の守護者を創造し、現在は4体であるが、定命の日 (yawm al-qiyāma) にはさらに別の4体が仲間を手助けするとのことである⁷³⁾。(このことは『コーラン』でこう述べられている)。「その日、8天使は、汝の主の玉座を高く掲げる」(69章17節)。

これらの天使たちは筆舌に尽くし難い程巨大である⁷⁴⁾。人間の姿をとるものは人のために日々の糧を執り成す。雄牛の姿をとるものは獣のために、また鷲の姿をとるものは鳥類のために、そして、獅子の姿をとるものは野獣のために、それぞれ日々の糧に執り成す。(40-7)⁷⁵⁾

C. 聖霊天使 (al-Rūh al-'amīn)

聖霊天使はある位階 (ṣaff) を占める天使であり、それ以外の天使は別の位階を占めている⁷⁶⁾。また至高のアッラーの許での高貴さにより、聖霊 (al-Rūh) と呼ばれている⁷⁷⁾。というのも、その(吐く)あらゆる息吹 (nafṣ) は生物の霊 (rūh) となるからである。(15-29; 32-9; 38-72; 66-12) アッラーがこの天使を創造し、星の動きを委託 (wakala) し、星辰下の諸物の動きを委任し、さらに4元素、鉱物、植物、動物から成る月下界を託したと伝えられている⁷⁸⁾。

この天使は恒星より偉大であり、強力で、高貴である。この天使は肉体的創造物より高尚である。至高、至大のご意志のもと、恒星の動きを止め、また動かせることができる。

D. イスラーフィール (isrāfīl)⁷⁹⁾

この天使はご命令を伝達し、肉体 (jasad, ajsad) に霊気 (rūh) を吹き込む。

神の使徒は「角笛の所持者がそれを口にし、命令を聞けるように耳をすまし、そして息を吹き込むや、いかなる執り成しができるものか」と言われた。

ムカーティルによればそれはラッパとのことであり⁸⁰⁾、ラッパの開口部の直径は天地の差し渡し幅があり、イスラーフィールは玉座を凝視し、神の命令を待っている⁸¹⁾。

そして、息を(ラッパに)吹き込むや、「ひとたびラッパが吹かれると、神のみ心にかなう者は別にして、天地のものはことごとく気を失う」(39-68)、のである。

アーイシャはカアブ・アルアフバルに⁸²⁾、「神の使徒が、『ジブリール、ミーカーイール、イスラーフィールの主よ。ジブリールとミーカーイールに関してはコーランで聞き知っておる。だが、イスラーフィールについてお聞かせて下さい』、と言われたのを聞いた」、と伝えている。

そこで、カアブは「(イスラーフィールは)偉大な天使であり、4枚の羽を持ち、1枚は東、他の1枚は西を占め、3枚目は天から地までを覆い、4枚目は神の偉大さを護持している」、と(使徒に)伝えた。さらに、その両足は第7天の底につき、頭部は神の御脚台にまで届いている。またその両目の間には貴石で作られた「板」があり、神が僕に命令を下される時には、イスラーフィールの両目の間にある書板に書き込むようにと「筆」に命ぜられる⁸³⁾。そして(それらは)ミーカーイールに伝えられる」、と述べた。

E. ジブリール (jibrīl)⁸⁴⁾

ジブリールは「誠実な啓示・靈感 (amīn al-waḥy)」であり⁸⁵⁾、「聖性の護持者 (khājīn al-quḍs)」であり、また「聖霊 (al-rūḥ al-quḍs)」とも「大天使 (al-nāmūs al-akbar)」⁸⁶⁾、「天使の孔雀 (tāwūs al-malika)」とも呼ばれている⁸⁷⁾。

以下のような話 (khabar) が伝わっている。至高の神が天啓の言葉を述べられたときに、天の居住者達はまるで岩が打ち砕かれるような轟音を耳にし、打ちのめされていたところにジブリールがやって来た。その時恐怖が一同の心を占めており、「ジブリールよ、神はあなたに何とおっしゃっているのですか」と聞いた。ジブリールが「真理 (al-haqq) だ」と答えると、一同は「真理、真理」と叫び続けた。

またこのような話もある。神の使徒がジブリールに、「神がお造りになったままのそなたの(真実の)姿を見たい」と言った時に、(ジブリールは)「そなたはそれに耐えられまい」と答えた。しかし預言者は「お見せ下さい」と言ったので、満月の夜、(メディナ郊外の)バキアにある墓地で見せようと約束された⁸⁸⁾。

そしてジブリールが真の姿を現したとき、その姿は地表を埋め尽くしており、預言者はそれを見て失神した⁸⁹⁾。預言者が正気を取り戻すと、ジブリールは元の姿になった。すると預言者は、「神のお造りになられたものが、このような(強大な)ものとは思わなかった」と言われた。ジブリールは、「その肩の上には玉座が、両足は最下天の水平線上にあるイスラーフィールの姿を見たならば、一体どのようになる」と聞いた。「神はその偉大な力でイスラーフィールを燕ほどの小ささにもできる」と続けた⁹⁰⁾。

カアブ・アルアフバルは、「ジブリールは最も優れた天使であり、6枚の翼を持ち、その1枚1枚に100枚の羽がついており、さらに、その背後には2枚の羽があり、村を滅ぼす時には(その2枚を)広げるだけである」と告げた⁹¹⁾。

預言者に、「まことにこれは力強い神の使徒の言葉である」(81-20)との啓示がもたらされた時に、使徒はジブリールにその威力 (quwwa) について尋ねると、「ロトの民の村を2枚の羽で空中に持ち上げ⁹²⁾、天の住民が鶏の鳴き声を聞いている所まで運び、逆さまに(ひっくり返した)」と言った⁹³⁾。

ジブリールの援助者は全世界を託されており、悪や害を遠ざけるために強大な力を発揮する

のが役目とされている。

F. ミーカーイール (mīkā'il)⁹⁴⁾

ミーカーイールは身体の糧、叡智、魂に関する知識を司る。カアブ・アルアフバルは、「第7天に波立つ海があり、(52-6)、その真ん中に神のみが知り給う天使と、ミーカーイール、その姿と翼の数は神のみがご存知の天使が立つ。その口を開けば、諸天は海の中のケシ粒のごとくとなり、また天地間の人々を見下ろすや、その火によって人びとは燃え尽くされる」と言った。

ミーカーイールには全世界を託された援助者がおり、それらは、4大要素とその生産物の力を活性化し、諸物における目的を達成し、完璧さに至らしめる存在である。これらの援助者は風、雲、雨、植物、動物、鉱物、に内在する天使と同じである。

G. イズラーイール ('izrā'il)⁹⁵⁾

イズラーイールは諸物を停止させ、霊(rūh)を身体から切り離す。カアブ・アフバルは、「イズラーイールは最下天に在って、その両足は地の涯に、頭是最下天に、そして顔は「保持された書版」に面するように神がお造りになった。またイズラーイールには死者に相当する数の援助者がおり、全ての被造物者はその両目に(書き込まれて)あり、その糧が尽き、与えられた定命(ajal)を終えるまでその霊を奪われることはない」、と伝えた。

アシュアブ・ブヌ・アスラムは、「神の友(al-khalīl、アブラハムを指す)⁹⁶⁾が死の天使に対し、(死すべき)魂(nafs)が東と西にあり、他方で疫病(wabā'a)が蔓延し、反対側では二つの軍勢が対峙して(死者が出ると予想されて)いるときに、一体どのように勤めを果たすのかと尋ねた。すると死の天使は、霊(複数形、irwāh)を呼び寄せるのじゃ。それらは指呼の間にある」という話を伝えている⁹⁷⁾。

またワフブ・ブヌ・ムナッビフは⁹⁸⁾、「ダーウド(ダビデ)の子、スライマーン(ソロモン)が死の天使と友になるためにその姿を見たいと思ったが、ある時玉座の下から現れた。ソロモンが誰であるかと聞くと、死の天使と答えた。その瞬間にソロモンは気を失った」と言った。

死の天使は神に、「そなたの僕、スライマーンは私の姿を見たいと言い、ご存知のごとく彼の前に姿を見せました。神よ、どうか彼の力を強めて私の姿を見られるようにして下さい」と懇望した。そこで神は、「彼の胸に手を当てよ」と言われたので、命ぜられた通りにすると、スライマーンは息を吹き返した⁹⁹⁾。

スライマーンが死の天使に、「実にあなたは偉大な創造物であることよ。天使たちはみなあなたのように偉大なのですか」と聞くと、死の天使は、「真実を以ってそなたを預言者として遣わされたお方に懸けて。今、わしの両足は天使の肩の上であり、その頭は500年の距離のある第7天を突きぬけ、また、両足は500年の距離で広がっている大地を突き破っている」と答えた。彼は口をあげ、頭を持ち上げ、腕を広げている。神が両唇を結ぶのをお許しになると、天地間の一切は包みこまれてしまう。

スライマーンが、「大事なことが書き込まれているのか」と聞くと、死の天使は、「神の預言

者よ、不信者の霊を奪う私の姿を見れば如何か」と聞いた。スライマーンは、「訪問者として私のところに来たのか、それとも霊を奪うためか」と尋ねると、「訪問者だ」と答えた。（このようにして）スライマーンは死の天使と友人となり、天使は木曜日毎に訪れ、日没まで居続けた。

ある日、スライマーンは、「ある人の霊は奪い、別な人は許しているので、そなたは公正（'adal）ではない」と言う、「問われる者は問う者より知識に欠ける。本があり、そこに奪う者の名が書き込まれており、シャーバーン月の中間の夜から翌年の同じ夜まで（書き込まれた状態で）止まる」と答えた¹⁰⁰⁾。

タウヒードの民¹⁰¹⁾ ならばムスクに漬けられていた白絹でできた右側からその霊を奪って天（'Illiyūn）に昇り、不信者の場合はタールを塗りこんだ衣装で作られた左側から霊を取り、牢獄（Sijjīn）に下る¹⁰²⁾。人々の事柄は「隠されたものも明らかなものもお知りになるお方のものにもたらされ、これまでになしたことが告げられる」。 (9-94)

アル・アウマシュとハイマの伝えるところによれば、死の天使はダーウドの子、スライマーンのところを訪れ、同席者の一人に視線を合わせ、凝視し続けた。死の天使が帰ったときに、件の男は、あれは何者かと預言者に尋ねた。死の天使だと告げると、まるで私（の靈魂を）望むようにじっと見ておりました、といった。スライマーンが男に、「どうして欲しいのか」と聞くと、「あのものから私を解放し、ヒンドの最果てにまで運んでいくように風にお命じ下さい」と言った。スライマーンは男の望み通りにした。そして死の天使に、「わしの同席者の一人を長く見つめていたな」と聞くと、「あの男の靈魂を素早くインドの涯まで運んでいくように命じられていたのに、そなたの許にいるのを見て驚いたのだ」とその訳を話した¹⁰³⁾。

ワフブ・ブヌ・ムナツビフは、「死の天使が暴虐極まりない者（jabbār）の靈魂を奪い、天に到ったときに、ある天使が、『靈魂を奪うようにと命じられた者のうちで、最も慈悲をかけるのはだれに対してか』、と聞かれた。すると『ある女の靈魂を奪うように命ぜられ、その者のところに赴いたが、女は子供を生んだばかりであり、別離（の悲しさ）ゆえに女を、また年齢と乾ききった（水無しの砂漠の）存在ゆえにその幼子に情けをかけてやった』と答えた。そこで死の天使は、「望み通りにその僕に慈悲を注がれるお方に讃えあれ」と言った¹⁰⁴⁾。

H. カルービYYーン (al-karūbiyyūn)¹⁰⁵⁾

この天使は聖なる園におり、至高の神のみを凝視し続けている。神性が備える美に魅了され、日夜倦むことなく神を賛美し続ける。

伝承によると、神の許には（行程）30日の（直径の）太陽が昇る白色の土地があり、ここは瞬時も逆らわない神の被造物で満ち溢れている。被造物たちは「神の使徒よ、これらの者はアダムの子孫たちですか」と尋ねると、「アダムを創造したことを知るものはない」と答えられた。すると、「イブリースも同様ですか」と聞くので、使徒は「神はイブリースをお造りになった後で、『そのたたちの知らないものを創り出した』（16-8）と述べられた」。

I. 7層の天の天使 (malā'ika sab' samawāt)¹⁰⁶⁾

カアブ・アフバール曰く、「これらは最後の審判時まで、倦むことなく、立っている時も、座っ

ているときも、(礼拝の) 跪いているときも、平伏時にも、常に神を誉め、讃えている」。

そして最後の審判の時が来ると、「神に讃えあれ。われらは汝にこそ相応しき行いで崇めてまいりました」と言う。

イブン・アッパースによれば、現世にいる天使は雄牛の姿をし、イスマーイールと名付けられており¹⁰⁷⁾、第2天の天使はワシの姿をしミーカーイールと、第3天はハゲタカの姿をしサーイド・ヤーイールと、第4天は馬の姿でシルサーイールと、第5天は天女 (hūri) の姿でカルカーイールと、第6天は子供の姿でサムハーイールと、そして第7天は人間の姿でルフアーイールと、それぞれ名付けられた天使がいる。

そしてワフブによれば、第7天の上には覆いが掛けられ、そこにはあまりに数が多いので互に見知らぬ天使たちが様々な言語で耳をつんざくように神を賛美し続けているという¹⁰⁸⁾。

J. 記録天使 (al-hafaza)

記録天使は「高貴なる書記天使 (al-kiram al-kātibūn)」である。

イブン・ジャリーフによれば、記録天使は人間 (banū ādam) を託された二体の天使であり、一体は右、他は左についている。

また、記録天使は4体で、2体は日中、他の2体は夜間に、そして5番目の天使は昼夜を分かたず (人から) 離れない。不信心者にも記録天使が付いており、護持の徴 (であるコーランの詞章) は不信心者に関しても下されているからである。その文言は、「しかし、おまえたちの上には監視役がいる。気高い書記役がいる。彼らは、お前たちの所業をよく知っている」。(82-10~12)

またある伝承に、「この天使は人が罪を犯した時に、6時間 (書き込まないで) 筆を挙げておく。そして改悛した場合は赦してやり、そうでなければ書き込む」、とある¹⁰⁹⁾。

別な伝承によれば、「天使が (罪を) 書き込んでも、(その者が) 善行を施すと、右の天使が左の誠実な天使に、『かの者がなした10の善行のうちの一つを取り下げて残りの9つを (天上に) 伝えるので、この悪行を (記載から) 取り除け』と言ったので、左の天使はそうのように処置した」とある¹¹⁰⁾。

アナス・ブヌ・マーリクは、「神の使徒は各信者に2体の天使を託し、全ての行為を書きとらせる。その者が死ぬと、『わが主よ、そなたの僕の命を奪いました。どこに持って行くべきでしょうか』、と聞くと、神は、『わが天はわれを敬う天使で溢れておる。地はわれに従う被造物で満ちておる。わが僕の墓に連れて行き、われを讃え、その偉大さを賞讃させ、アッラーの他に神なしと唱えさせて、それらを善行として最後の審判の日まで書き残せと言われた』と伝えている¹¹¹⁾。

K. 昼夜の天使 (al-mu'aqqibāt)¹¹²⁾

神の恵み (barakāt)¹¹³⁾ を (天上界から) もたらす天使であり、人間の霊 (arwāh) と行いと共に、日夜、天界に上る。ひとが朝一番の祈りに専心したり、夜明けの祈りを捧げると、昼の天使が訪れ、人びとの祈りを見届け、夜の天使がその許を去る。日没の祈りの時も同様である。そし

て祈りと祈りの間に犯した罪は祈りが清算する。そして（天上には）ただ善行のみを伝える。昼夜の天使の使命は預言者が伝えている。「預言者は、神は、『アダムの子らよ、そなたたちは正しい道を歩んではいない。（何となれば）十分な恵みをもたらしたのに、わしに反抗的な態度を取っておる。わしからはそなたらに良きものを下したが、そなたらの悪行は天上にまで上ってきておる。日夜、高貴な天使（malak karīm）が絶えずそなたたちの悪行をわしにもたす。アダムの子らよ、そなた以外の者からある話を聞きその意味が分からない時は、すぐにそれを嫌え』と言われたと伝えている」。

L. ムンカルとナキール（Munkar wa Nakīr）¹¹⁴⁾

荒くれで乱暴な天使であり、主と預言者に代わり墓で全ての人間に質問する。アナス・ブヌ・マリークによれば、「僕は墓に横たえられると、草履の足音を聞き、二人の天使が訪れて死者の横に座り、この男、すなわち、預言者ムハンマドに何を告げるかと聞く。敬虔な者は、この方は神の使徒であると証言しますと言う。すると天使は、そなたの火の椅子を見よ。すでに天国の椅子に置き換えたぞ、と告げる。他方、不信心者や背教徒は、この人については皆が言うとおりです。だが私には分かりません、と言う。すると彼らは鉄槌で一撃され、その叫び声は人間とジン以外（thaqlayn）で近くにいる者の耳に届く」。

M. 巡行天使（al-sayyāhūn）

天使の1種であり、神を祈念する集まりを好み、祈念の集いを目撃すると心から喜ぶ¹¹⁵⁾。

アブー・サイード・アルホダリーによると、地上には「行為を記した書」に加えて巡行天使がおり、神を祈念している人々を見つけると、望むものは集れと叫ぶと、そこで天使は人びとを（最下天の）天空にまで連れて行き、戻った時に神は、「わが僕はいかなる物を残していくのか」と言われた。そこで（天使たちは）「われらは彼らにあなたさまを褒め称え、賞讃し、敬わせます」と言った。

そこで神は、「彼らはわしの姿を見たのか」と聞かれたので、否と答えると、「わが姿を見ればどうか」と言われたので、「もしあなたさまのお姿を彼らがみれば、ますます賛美と賞讃を増すであります」と天使たちが答えた。

神が、「彼らはいかなる（ものからの）加護を求めているのか」とお聞きになると、「（地獄の）劫火でございます」と答えた¹¹⁶⁾。すると神は、「既に見たのか」とお尋ねになったので、「いいえ」と返答した。神は、「（劫火を）見ればいかがか」と言われたので、（天使たちは）「もし彼らが目撃すれば、一段と恐れ、ますますご加護を望むでしょう」と返した。

神が、「かれらは何を望んでおるのか」とお聞きになったので、（天使たちは）「天国（janna）でございます」と答えた¹¹⁷⁾。神が、「既に見たのか」とお尋ねになったので、否と答えた。（それに対して）「（天国を）見ればいかがか」とお聞きになったので、（天使たちは）「もし目撃すれば一段と天国を望むようになるでしょう」と返事した。

そこで神は、「かれらに赦しを与えたことをそなた達に証言する」と言われた。すると（天使たちは）「彼らのなかに、それらを望まずに、ただ彼らに必要なもののために来たのがいます」

と告げると、(神は)「その者こそ仲間達が同情しない人びとだ」と言われた。

N. ハールートとマールート (Hārūt wa Mārūt)¹¹⁸⁾

これらはバベルで罰せられた天使である。イブン・アッバースによれば、アダムが裸体のまま天国を追放された時に、天使がこれを見咎めて神に、「これはアダムである。創造の何と素晴らしいことか。(彼を)咎めることなく、願わくば罪を免れさせ給え」と言った。そしてある天使の側を通りかかると、(その天使は)主の契約違反を咎めた。当時、咎めていたのがハールートとマールートである。

そこでアダムは、「我が主、天使よ！慈悲をかけ、咎めることなかれ。我が身に起こったことこそ神の定めである。神は反抗するかどうか試され、それらの天使を至高天に上げるのを止められたと」言った。

そしてイドリース(エノク)の時代になると、二体はイドリースに向かい、降り掛かった出来事を話した¹¹⁹⁾。次いで、「神がわれらをお許しになるように呼びかけてくれるか」と尋ねた。するとイドリースは、「どのようにそなたらの許しを求めるべきか知らない」と答えた。すると、「許しを求めよ、もしわれらの姿が見えれば許しが叶ったことであり、そうでないならばわれらは死に至る」と述べた。

そこで、イドリースは規定の(祈りの前の)洗浄(tawadda')を行ってから神に許しを求めた¹²⁰⁾。しかし見回しても、彼らの姿を目にしなかったので、二体に罰が下されたことを悟った¹²¹⁾。

ハールートとマールートはバビロンにまで連行され、現世(al-dunyā)の罰か、あるいは来世(al-ākhirā)の罰かを選ばされた。彼らは現世の罰を選んだが、かれらはバビロンの井戸で逆さまに吊り下げられた状態で、「約束の日」まで罰を受け続けている。

アムル・ブヌ・ウマルの伝えるところによると、「地上の人間が神に反抗するのを見た天使は、『これらの者はあなたの偉大な力を何と知らないことよ』と言ったが、神は、「そなたらも人の肌をしていたら、きっと神に反抗するであろう」と言われた。

天使たちは、「どうしてそのようなことが起こりえるでしょうか。我らは常にあなたの恵みを賛美し、聖なるものと讃えておりますのに」と言った。すると神が「二体の天使を選べ」と言われたので、天使たちはハールートとマールートを選んだ。

ハールートとマールートが地上に降り立つと、人間が持つ欲望を背負わされた。ひとの真似をし、ついに反抗するようになった。そこで、現世の罰か来世の罰かを選ばされ、ハールートとマールートは互いに顔を見合わせて、相手の意見を求めたが、どちらかが、「現世の罰には終わりがあある(inqāṭa'a)が、来世の罰はそうではない」と言って現世の罰を選び取った。

ハールートとマールートこそ、「バビロンにハールートとマールートを下ろそう」(2-102)と述べられている天使である。

また別の伝承によれば、「人間に天使を遣わそうと思う。しかし余とそなたたちの間には、わしと等しいものを置かず、殺しも盗みのしないものはおらぬ。」

カアブ曰く、「彼らが降り立った日は、神が定める時まで終わりはない」。

O. 存在物を託された諸天使 (al-malā'ika al-muwakkalūn bi-l-kā'ināt)

彼らには腐敗を糾し、取り除く役目を負い、諸物を託されている。全ての人には天使がついており、神は望むままにその数を増やされる。

アブー・ウマーマは以下のような話を伝えている。「信者 (mu'min) 一人一人には160体の天使が付託されており、目に見えないものを追い払っている。そのうちの7体の天使はあたかも夏の日ハチミツにたかるハエを払うように振舞う¹²²⁾。そしてこの160体の天使の任務は預言者の光を介して預言者を知ることである。(このことを) 栄養を例にして説明しよう。栄養は生物と植物に共通する事象であり、この例を通した他の事物に関することを類推 (qāsa) できるであろう。

栄養として取り込んだ物は多数の天使が作用しなければ栄養物とはならないと言われている。栄養摂取とは取り込んだ食べ物や栄養が変わることを指す。食べ物自体は単なる物体であり、そのままに血液や肉体、骨になるのではない。それはちょうど作業員が手を加えないと、小麦が(自ずから)小麦粉やパン生地、さらにパンに変わらないのと同様である。そして目に見える (zāhir) 作り手は作業員であるが、目に見えない (bāṭin) 作り手は天使である¹²³⁾。実に神はそなたに目に見えるみ恵みも目に見えないみ恵みをもお与えになっている。

(その変化は以下のように行われる) 栄養物はそれ自体では動かないので、まず天使が栄養物を筋肉や骨の近くにまで引き付ける必要がある。次いで、その移動した場所に熱が加わって固定されなければならない。第3段階として、血の形が出来上がり、続いて第4段階として余分な栄養分が排出され、その後、骨や筋肉に相応しい形状が出来上がり、第6段階では、骨としてあるいは筋肉として必要なものが付着し、第7段階で、円形には円形の、幅広には幅広の、そして空洞のあるものは空洞のあるものと、それぞれ適量を選ばれ、余分な物は排出されなければならない。このようにして、鼻を構成するのに必要な分が腿へと付着するとそれは異形となる。鼻には繊細な量が、瞳孔には清澄なものが、腿には粗いものが、骨には硬いものが、適量と形状に配慮されなければならない。そしてもし天使が適量を見張っていなかったならば、すべての身体器官に栄養が行き渡ったが、足だけに届かないことが起こる。すると足だけが幼少のままで止まり、他の部分は成長を遂げたのに、足は子供のままの人となり、無用となるであろう。

このような作業が天使に付託されている。人体を託された天使の働きはこのようなものである。これらの天使は人が眠っている間も、気づいていない時も、働き続けており、体の健全さを保持し続けてくれている。(『コーラン』16章18節にあるように)「たとえおまえたちが神の恩恵を数えたてようと、とうてい数えつくすことはできない」のである。このことは全ての存在物にもあてはまる。全ての物に神は天使を付託されている¹²⁴⁾。

ここで天使の叙述が終わるが、『驚異』の最終部で再び天使が取り上げられ、『驚異』で説明された各天使の形状 (ṣūra)、衣服 (malabis)、色彩 (alwān)、が記されている。こうして『驚異』は冒頭と終結部に天使の話題を取り上げ、その間に天地間の事物説明を挟み込む枠構造を成しているが、そこにカズウィーニーの「諸物、諸現象に神の徴を見、その全てに天使が関わって

いる」とする認識と、この事実を読者に伝えたいとする著述意図が汲み取れる。

4. 『驚異』とイスラーム天使論

最後に『驚異』における天使の叙述、解説の特徴はどこにあるのかを考察する。

『驚異』天使論の特徴は、客観的な叙述に終始し、神学的、哲学的、な議論に関わらない著作態度がある¹²⁵⁾。これは森羅万象を網羅的に取り上げて解説し、各項目をアルファベット順に配置して利用、検索の便を図ろうとする著述形式に基づく。この形式は『驚異』の百科全書的特質を表すとともに、『驚異』が想定する読者層とも密接に関連する。

つまり『驚異』は一部の専門家向けの著作ではなく、広範囲の享受者（読者）向けの著作であり、その著述意図は挿絵の付加とともに十全に達成されて、『驚異』は広く伝播されていく。当然のことながら、このような著作意図は行文中での複雑な議論を排除する¹²⁶⁾。

それゆえ、哲学的考察は冒頭の「天上の居住者」における、天使の組成、特質、権能の説明部分に止まり、さらに、この個所においても『コーラン』の引用を多用して一般読者の理解を助けようとの配慮が尽くされている。

次に『驚異』「天使論」の特徴をその叙述内容から見れば、ジブリール、イスラフィール、ミーカーイール、イズラーイールのいわゆる4大天使のうち、ミーカーイールの説明が極端に少ない点と、逆にイズラーイールに多大の頁が割かれている点であろう。

ミーカーイールに関しては、ユダヤ・キリスト教における「天使長」や「ヘブライ人の守護者」の呼称が示すごとき高い地位、評価に比して、イスラーム、あるいはカズウィーニー、独自の低評価として注目されるとともに、イスラームの天使像が必ずしもユダヤ・キリスト教からの一方的な影響関係にはないことの例証ともなっている¹²⁷⁾。

イズラーイールに関しては、「死の天使」としてのムスリムの関心の高さを反映したものと考えられ、その叙述は、アブラハム、ソロモンの詳細な逸話を核に、どのように人々から霊が奪われるのかの具体的な説明がなされ、さらに、死が必然であることが示されるとともに、死の天使の情け深さ、ひいては神の慈悲深さの説明へと続く。このように、イズラーイールの叙述箇所は『驚異』「天使論」において、その中心であり、また、以下に述べる、具体性、物語性をも表している。この点は、ハールートとマールートに割かれている文章量の多さと通底する特徴でもある。

『驚異』の天使論の第二の特徴はその叙述法にあり、その叙述の特徴を列举すれば、以下のようになる。①直接的な会話・対話形式、②物語形式、③具体性、親近感の醸成への配慮、④天使を介しての神の慈悲深さの記述。

①に関しては、ジブリールと預言者との対話、死の天使とアブラハムやソロモンとの対話、さらに、神と巡行天使との会話が挙げられよう。この対話形式の採用により、具体的な情景を浮かび上がらせる効果をもたらすとともに、読者の内容理解を助ける働きをする。

②に関しては、ジブリールの項でのように臨場感を醸成させ、物語に対する興味を掻き立てる工夫がなされている。

③は『驚異』全体に通底する、自己の著作を通して神の「創造の驚異」、「偉大さ」、「親密さ」

を伝えようとする著述態度に繋がる。この特徴は存在物を託された諸天使の項で顕著である。

④記録天使や巡行天使の記述のごとく、罪に対する改悛を聞き入れる天使、ひいては神、の「慈悲深さ」を強調する叙述態度がある。

このような叙述法、叙述内容から『驚異』が想定する読者層や受容層が浮かび上がる。『驚異』と同様、一般信者を読者に想定するスューティーの『配列』は、あくまで流布するハディースを主題毎に配列するのみで、時に矛盾する叙述が含まれていても、それらを調節することなく並置して、その解釈を読者に委ねている¹²⁸⁾。そこに編者の解釈が加わってはいない客観性を保っている。他方、『驚異』は流布する諸文献を編者が取捨選択して整理し、その具体的な叙述を介して読者に生き生きとしたイメージを植え付けようとしている。

このことは『驚異』の特徴である挿絵と通底する編集態度である。そして『驚異』と一体をなすカズウィーニーの他の著書である『諸国の遺跡』と好対照をなす現象でもある。後者の対象は地理的情報であり、具体性に富むが、写本においては通常挿絵は施されていない。他方、『驚異』において、特に天使論を収める第一部（天界論）においては、叙述対象は不可視であり、その理解を高めるには可視化するにしくはない。ここに不可視のものを理解したいという読者の要望に応えようとする著者、あるいは書写者の教育的配慮が窺える。

このような様々な著述上の配慮が尽くされたカズウィーニー『驚異』の天使論は、イスラム世界に広く伝播し、後世に多大の影響を及ぼし続けたのである。

[文献略称]

- DI Dictionary of Islam (Th. P. Hughes)
 EAL Encyclopedia of Arabic Literature
 EI The Encyclopaedia of Islam, 2nd ed.
 EQ Encyclopaedia of the Qur'ān
 Lane Arabic-English Lexicon
 事典 歴史学事典 (弘文堂)
 辞典 岩波イスラム辞典

[参考文献]

- Awn, Peter J., *Satan's Tragedy and Redemption: Iblīs in Sufi Psychology*, with a foreword by Annemarie Schimmel, (Studies in the History of Religions – Supplements to NUMEN, XLIV), Leiden, E. J. Brill, 1983.
 El-Azma, Nazeer, "Some Notes on the Impact of the Story of the *Mi'rāj* on Sufi Literature," *The Muslim World*, 63 (1973).
 Berlekamp, Persis, *Wonder, Image, and Cosmos in Medieval Islam*, New Haven & London, Yale University Press, 2011.
 Blacker, Carmen and Loewe, Michael (eds.), *Ancient Cosmologies*, London, George Allen & Unwin, 1975. (矢島祐利・矢島文夫訳『古代の宇宙論』、海鳴社、1985年)。
 Burge, S. R., *Angels in Islam: Jalāl al-Dīn al-Suyūṭī's al-Ḥabā'ik fī akhbār al-malā'ik*, London and New York, Routledge, 2012.

- Bürge, Johann-Christoph, "Der Mensch und All im Islam," in Maja Svilar(ed.), *Mensch und Kosmos: vom Verständnis der Zusammenhänge*, Bern, P. Lang, 1980.
- Calverley, E. E., "Doctrines of the Soul (*Nafs and Rūh*) in Islam," *The Muslim World*, 33 (1943).
- Chipman, Leigh N. B., "Adam and the Angels: An Examination of Mythic Elements in Islamic Sources," *Arabica*, 49 (2002).
- Cook, Michael, *The Koran – A Very Short Introduction*, Oxford University Press, 2000. (大川訳・牧野解説『〈一冊でわかる〉コーラン』、岩波書店、2005年)。
- Crone, Patricia, "The Religion of the Qur'ānic Pagans: God and the Lesser Deities," *Arabica*, 57 (2010).
- Ess, Joseph van, "Vision and Ascension: *Sīrat al-Najm* and its Relationship with Muhammad's *mi'rāj*," *Journal of Quranic Studies*, 1 (1999).
- Ethé, Hermann (tr.), *Zakaria ben Muhammed ben Mahmūd el-Kazwīnī's Kosmographie*, nach der Wüstenfeldschen Textausgabe, Leipzig, Fues, 1868.
- Fahd, M. Toufie, "Anges, Démons et Djinn en Islam," in *Génies, Anges et Démons* (Sources Orientales VIII), Seuil, 1970.
- Faure, Philippe, *Les Anges*, Collection "Bref" fondée par François Boespflug, Cerf, 1988. (片木智年・訳『天使とはなにか』、せりか書房、1995年)。
- Gardet, Louis, "Les anges en Islam," *Studia Missionalia*, 21 (1972).
- al-Ghazālī, Abū Ḥamīd Muḥammad, *Kitāb Iḥyā' 'ulūm al-Dīn*, Cairo, 1930.
- Giese, Alma (üzt.), *Al-Qazwīnī: Die Wunder des Himmels und der Erde*, Stuttgart, Erdman in K. Thienmanns Verlag, 1986.
- Guiley, R. Ellen, *The Encyclopedia of Angels*. (大出訳『天使百科事典』、原書房、2006年)。
- Guillaume, A., *The Life of Muhammad – A Translation of Ibn Ishāq's Sīrat Rasūl Allāh*, Karachi, Oxford University Press, 1955.
- Haas, Samuel S., "The 'Creation of Man' in the Qur'ān," *The Muslim World*, 31 (1941).
- Hees, Syrinx von, *Enzyklopädie als Spiegel des Weltbildes : Qazwīnī's Wunder der Schöpfung – eine Naturkunde des 13. Jahrhunderts*, Wiesbaden, Harrassowitz, 2002.
- Heinen, Anton, M., *Islamic Cosmology: A Study of As-Suyūṭī's al-Hay'a as-saniya fi l-hay'a as-sunniya with critical edition, translation, and commentary*, Beirut, Franz Steiner, 1982.
- Ibrahim, Lutpi, "The Questions of the Superiority of Angels and Prophets between Az-Zamakhshari and Al-Bayḍāwī," *Arabica*, 28 (1981).
- Izutsu, Toshihiko, *God and Man in the Koran*, Tokyo, Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies, 1964. (井筒(牧野訳)『コーランの人間像』、仲間社、1975年)。
- Jadaane, Fehmi, "La place des Anges dans la théologie cosmique musulmane," *Studia Islamica*, 41 (1975).
- Keck, David, *Angels & Angelology in the Middle Age*, Oxford, Oxford University Press, 1998.
- al-Kisā'ī, Muḥammad b. 'Abdallāh, *Qīṣaṣ al-anbiyā'*, ed., Isaac Eisenberg, Leiden, E. J. Brill, 1922.
- al-Ma'arri, Abū al-'Alā', *Risāla al-Ghufrān*, ed. Muḥammad 'Izzat Naṣr al-Lāh, Bayrūt, al-Maktaba al-Thaqāfiyya, nd. (tr. Vincent-Mansour Monteil, *L'Épître du pardon*, Gallimard, 1984).
- Macdonald, D. B., "The Development of the Idea of Spirit in Islam," *Acta Orientalia*, 9 (1931).
- Margoliouth, D. S., "Harut and Marut," *The Muslim World*, 18 (1918).
- Murata, Sachiko, "The Angels," in ed., Seyyed Hossein Nasr, *Islamic Spirituality – Foundations*, London, Routledge & Kegan Paul, 1987.
- Musīr, Muḥammad Sayyid 'Aḥmad, *al-Rūḥ fi Dirāsāt al-Mutakallimīn wa-al-Falāṣiḥa*, Cairo, Dār al-Ma'ārif, 1988.

- Muslim, *Ṣaḥīḥ*, Cairo, 1955. (磯崎・飯森・小笠原共訳『日訳 サヒーフ ムスリム』、日本ムスリム協会、1989年)。
- Nasr, Seyyed Hossein, *An Introduction to Islamic Cosmological Doctrines*, (re. ed.), London, Thames and Hudson, 1978.
- Netton, Ian Richard, "The Perils of Allegory: Medieval Islam and the Angels of the Grave," in I. R. Netton (ed.) *Studies in Honour of Clifford Edmund Bosworth, vol. 1: Hunter of the East – Arabic and Semitic Studies*, Leiden, Brill, 2000.
- Porter, J. R., "Muhammad's Journey to Heaven," *Numen*, 21 (1974).
- al-Qazwīnī, Zakariyyā' b. Muḥammad b. Maḥmūd, *'Ajā'ib al-makhlūqāt wa-gharā'ib al-mawjūdāt*, München, Bayerische Staatsbibliothek. Cod. arab. 464. (<http://www.bsbmuenchen.de>).
- , ed. Sa'd al-Faqqī & Karam al-Sayyid al-Azhārī, Alexandriyya, Dār Ibn Khaldūn, nd.
- , *Athār al-Bilād wa Akhbār al-'Ibād*, Bayrūt, Dār Ṣādir, nd.
- Reynolds, Gabriel, S., "A Reflection on Two Qur'ānic Words (*Iblīs* and *Jūdī*), with Attention to the Theories of A. Mingana," *Journal of the American Oriental Society*, 124 (2004).
- Silverstein, Adam, "On the Original Meaning of the Qur'anic Term *al-shayṭān al-raḡīm*," *Journal of the American Oriental Society*, 133 (2013).
- Smith, Jane Idleman and Haddad, Yvonne Yazbeck, *The Islamic Understanding of Death and Resurrection*, Albany, State University of New York Press, 1981.
- , "The Virgin Mary in Islamic Tradition and Commentary," *The Muslim World*, 79 (1989).
- al-Suyūṭī, Jalāl al-Dīn 'Abd al-Raḥmān, *Kitāb al-Ḥabā'ik fī akhbār al-malā'ik*. (q. v. Burge).
- Tavard, Georges, *Die Engel*, mitarbeit von André Caquot und Johann Michl, Freiburg, Basel, Wien, Herder, 1968.
- Webb, Gisela, "Hierarchy, Angels, and the Human Condition in the Sufism of Ibn 'Arabī," *The Muslim World*, 81 (1991).
- Wild, Stefan, "Die Andere Seite des Textes: Naṣr Ḥāmid Abū Zaid und der Koran," *Die Welt des Islam*, 33 (1993).
- Wüstenfeld, Ferdinand, *Zakariya Ben Muhammed Ben Mahmud el-Cazwini's Kosmographie. Erster Theil. Kitāb 'aḡā'ib al-makhlūqāt. Die Wunder der Schöpfung*. Aus den Handschriften der Bibliotheken zu Berlin, Gotha, Dresden und Hamburg. Göttingen, 1849. (筆者未見)。
- Zadeh, Travis, "The Wiles of Creation: Philosophy, Fiction, and the 'Ajā'ib Tradition," *Middle Eastern Literatures*, 13 (2010).
- Zbinden, Ernst, *Die Djinn des islam und der altorientalische Geister Glaube – Inaugural-Dissertation zur Erlangung der Doktorwürde der Theologischen Fakultät der Universität Zürich*, Bern, Paul Haupt, 1953.
- 青柳かおる『イスラームの世界観—ガザリーとラズイー』、明石書店、2005年。
- 井筒俊彦『意味の構造—コーランにおける宗教道徳概念の分析』(井筒俊彦著作集4)、中央公論社、1992年。
- 稲垣良典『天使論序説』、講談社、1996年。
- 同「天使の存在論」『西洋中世研究』、4号(2012年)。
- 大川玲子『聖典「クルアーン」の思想—イスラームの世界観』、講談社、2004年。
- 同『イスラームにおける運命と啓示—クルアーン解釈書に見られる「天の書」概念をめぐる』、晃洋書房、2009年。
- 同『イスラーム化する世界—グローバル化時代の宗教』、平凡社、2013年。
- 岡崎桂二「アラブ古典文学における詩霊(ジン、イブリース、シャイターン)の運命—『コーラン』『詩人の章』224節～227節をめぐる』『四天王寺国際仏教大学紀要』、41号(2006年)。
- 同「アラブ・イスラーム文化における百科全書の思想」『アラブ・イスラーム研究』、9号(2011年)。
- 同「ムスリムの食卓作法—ガザリー『宗教諸学の再興』『食卓の書』に即して」『アラブ・イスラーム

研究』、12号（2012）。

小杉泰『「クルアーン」語りかけるイスラーム』、岩波書店、2009年。

杉田英明「天路歷程譚の系譜—イスラーム世界とダンテ」『地中海 終末論の誘惑』（蓮見・山内編）、東京大学出版会、1996年。

竹下政孝「イスラームにおける天使・悪魔・妖鬼」『イスラームを知る四つの扉』、ぶねうま舎、2013年。

中村廣治郎『イスラムの宗教思想—ガザリーとその周辺』、岩波書店、2002年。

藤本勝次・伴康哉・池田修（訳）『コーラン』、中央公論新社、2002年。

守川知子監訳・ペルシャ語百科全書研究会（訳）「ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースイー著『被造物の驚異と万物の珍奇』」、『イスラーム世界研究』、第2巻2号～第6巻1号（2009年～2013年）。

[注 記]

- 1) アラビア語の天使 (malak, pl. malā'ika) は、ヘブライ語の「mal'āk」やラテン語の「angelo」と同じく、語源的には「使者」を表す。Cf., Lane, s. v. ma'lak, q. v. 'l, k (vol. 1, p. 82); EI, s. v. Malā'ika (D. B. Macdonald); al-Ma'arri, pp. 22-33. イスラーム天使論の依拠すべき基本的文献は前掲の他に、EQ, s. v. Angel (G. Webb); DI, s. v. Angel; Murata, であり、専著であるBurgeの第1章（4頁～108頁）、第8章（177頁～183頁）がイスラーム天使論の意義と問題点を詳細にまとめている。
- 2) 行為上の義務とされる5行 (al-arkān al-khamsa) と並んで、その存在を信奉することが義務とされているイスラームの6つの信仰箇条 ('aqā'id)。具体的には、唯一神（アッラー）、天使、使徒、啓典、来世、定命、とされ、天使は重要性において第2位に位置する。Cf, Murata, p. 324; EI, s. v. 'Aḳīda (W. M. Watt).
- 3) 後述のように、精霊、妖魔、悪鬼とされるジン、シャイターン、イブリースの関係は複雑であり、『コーラン』の、「われらが天使たちにこう言ったときのこと、『アダム』に跪拝せよ」。かれらはイブリースの他はみな跪拝した。彼らはもとジンに属した者で、主のご命令に背いたのである」（2-34、18-50）、を根拠にして、イブリースはジンの一族で、元来天使に属していたのだという解釈もある。Cf, EI, s. v. Djinn (D. B. Macdonald – [H. Massé]). 岡崎（2011）参照。このことに関し、日本でも教鞭を執ったカイロ大学講師ナスル・ハーミド・アブー・ザイドは、1992年、ジンの存在を否定したことが一因となって、背教者（ムルタッド）との告発を受けて教授昇進への道を閉ざされたばかりか、不信仰であると断罪され、国外退去を余儀なくされた事件がある。事件の詳細と意義、解釈はCook（大川訳）、63頁～66頁、大川（2013）、186頁～189頁。アブー・ザイドはオランダのライデン大学に移り、旺盛な研究活動を送り、『コーラン百科事典』中のIntensionの項も執筆している。Cf, EQ, s. v. Apostasy (W. Hallaq). Burge, p. 13. そして問題とされた彼のコーラン解釈については、Wild参照。また『コーラン』における不信仰 (kufr) の概念は井筒が詳述している。井筒、第7章「不信仰の概念の内部構造」、第8章「Kufrの意味の場」。
- 4) ジブリールやミーカーイールという名称から、イスラーム天使論におけるユダヤ教やキリスト教の一方向の直接的な影響を指摘するのが一般的だが、BurgeやChipmanは天使的存在に対する①イスラームにおける変容や、②イスラーム内部の創出、発展の二面を論じる。①についてはラファエロのセム的一神教間における位置付けの相違、②についてはムンカルとナキールというイスラーム独自の天使を挙げる。Burge, pp. 179-180; Chipman, p. 447, fn 89, p. 455. 墓中での懲罰天使についてはNetton参照。この2天使は、復活時における魂と肉体の復活、あるいは、死亡から復活までの死者の状況に関与し、キリスト教における煉獄の創出との比較上、興味深い存在である。Cf., EI, s. v. Adhāb al-Ḳabr (Wensinck, A. J. & Tritton, A. S.); EI, s. v. Barzakh (B. Carra de Vaux). 煉獄については『事典』「煉獄」（池上俊一）、参照。
- 5) キリスト教、特に「新約聖書」におけるイエスの天使に対する優位は、「新約聖書を読んでみるとは

とんど天使の姿が現れないことに驚かされる。メシア、人の子の姿がその他の形で神の顕現を背景に押しやり、無用のものにしたり、減ぼしてしまったのだ」と説明される。フォール（片木訳）81頁。*Cf.*, Burge, p. 5; *EI*, s. v. ʿĪsā (G. C. Anwati). 『天使百科事典』「宗教改革」、参照。イスラーム文化圏以外の天使論は前記フォールの他に、Keck; Tavad (ed.), の包括的な研究書を参照。

- 6) *Cf.*, *EQ*, s. v. Ascension (Michael Sells). Webbはイスラーム初期における天使の機能を、創造、啓示、終末、の3方向から論じる。*Cf.*, *EQ*, s. v. Angel (Webb). 創造に関しては、神は天地を創造した後人間（アダム）を創造した。そして、神は天使たちに人間に対して跪拝するように求めたが、イブリースのみはそれを拒んだ。この記述から、イブリースが本来天使であったのか、あるいは悪魔であったのかの議論が始まる。*Cf.*, Burge, p. 10; *EQ*, s. v. Creation (Daniel Carl Peterson); *EQ*, s. v. Night of Power (Roxanne D. Marcotte); *EQ*, s. v. Heaven and Sky (Maher Jarrar). またシャイターンに付せられる「ラジーム」の語意は「石を投げつけられた」と「放逐された」の2意があると指摘されている。*Cf.*, Silverstein. さらにChipmanは人間の創造時における天使の反応を比較宗教学に解明している。Chipman, pp. 434-455. イスラームにおける天地創造は、事典、「天地創造（イスラムの）」（中村廣治郎）。
- 7) ある日、大天使ジブリールがムハンマドを訪れ、「誦め」と告げたのを神の啓示の発端とする。『コーラン』74章1節～7節、96章1節～5節、参照。*EQ*, s. v. Revelation and Inspiration (Daniel A. Madigan). また「新約聖書」と同様に、マルヤム（マリア）への受胎告知も天使ガブリエルが行った。『コーラン』3章42節～48節。同所では複数の天使が告知するが、19章17節では告知天使は「われらの聖霊（rūhinā）」と呼ばれ、単数で男性の姿をしており、21章91節、66章12節でも同様である。このように『コーラン』では、聖霊、天使、ガブリエル、はともに通底する共通の要素と使命を帯びている。これはまた、「霊は主のご命令によって生じる」（17章85節）（参照、42章52節）とあるように、（神の）命令（amr）、聖霊、天使間においても指摘できることである。*Cf.*, *EQ*, s. v. Angel (Gisela Webb). マルヤム（聖母マリア）のイスラームにおける解釈は、Smith & Haddad (1989) 論文参照。
- 8) 天使の吹き鳴らすラッパとともに終末が訪れるとされる。『コーラン』69章13節。すべての人は各自の行為を天使が記録した帳簿に基づく審判を受ける。その際、天使の執り成し（shafā'a）の有効性に関しては一致した見解はない。参照、『コーラン』40章7節、42章5節、53章26節。*Cf.*, *EI*, s. v. Shafā'a (A. J. Wensinck); *EQ*, s. v. Intercession (Valerie J. Hoffman); *EQ*, s. v. Ridwān (W. Raven); *EQ*, s. v. Eschatology (Jane I. Smith); *EQ*, s. v. Apocalypse (Frederik Leemhuis); *EQ*, s. v. Ressurrection (Maurice Borrmans); *EQ*, s. v. Death and the Dead (Jacques Waardenburg). 終末時に吹き鳴らされる楽器はal-ṣūrあるいはal-nāqūr, al-būqとされる。『コーラン』では明示されていないが、その奏者は無名天使、あるいはイスラフィーール、またはジブリールとされていて、「呼ばれる者・召喚者（al-munādi）」（50-41）とも記されている。*Cf.*, *EQ*, s. v. Apocalypse (Frederik Leemhuis)。
- 9) 『コーラン』第8章（戦利品の章）は主にバドルの戦役を巡る啓示。624年3月、マディーナ近郊のバドルでムハンマド軍とマッカ軍が戦い、数で劣っていたにも関わらず、ムハンマド軍が勝利し、ムハンマドはマディーナでの地位を確固たるものとした。（3章123節～125節、8章12節）。この大勝を契機に、ムハンマドは自己の述べ伝える信仰は、純正な人（hanif）「アブラハムの宗教」であるとの宣言を行うようになったとされる。参照、『コーラン』I、60頁～61頁、注（28）。また多数の天使がムハンマド軍に加勢したとする伝承ともあいまって、神の加護と不信仰に対する懲罰の明証とされた。そしてこの戦役を機に、従来の人間的なものから不可視の存在へと天使像が変化したと説く学者もいる。Burge, p. 11, p. 106. *Cf.* Guillaume, pp. 289-314. 辞典、「バドルの戦い」（清水和裕）、参照。
- 10) いわゆるムハンマドの昇天（mi'rāj）伝承は『コーラン』17章1節に基づくが、その簡単な記述から、後世ハディースやタフシール等で諸種の付加、変容が成された。『コーラン』17章1節によれば、ムハンマドはメッカのカアバ神殿からイェルサレムまで夜旅（isrā'）をしたとされている。さらに、ジ

- ブリールと解されている天使 (rūh) に導かれて、ムハンマドはイエルサレムから昇天し、アッラーとの見神 (ru'ya) を果たした後、帰還したとされる伝承が広まった。Guillaume, pp. 181-187. ムスリム『サヒーフ』、「夜の旅 (イスラー) と昇天 (ミイラージュ) について」(1巻, 122頁～134頁)。このジブリールに導かれての水平と垂直の2方向の移動、また、昇天物語における上昇、下降の移動は、啓示過程の比喩、暗示と理解されたり、また、終末論における復活、再生のプロトタイプとされた。Cf., Burge, p. 87. この点において、キリスト教におけるイエスの昇天と比較して興味深いテーマであるが、詳細はダンテ『神曲』への影響関係をも含む杉田論文参照。Cf., *EQ*, sv. Ascension (Michael Sells) ; Porter, p. 68. ラズビーのミウラージュ解釈を扱う、青柳、175頁～193頁、参照。またムハンマドの幼少時に、「天使が訪れて彼を羽交い絞めにし、胸を開いて凝血を取り出し、その後、ザムザムの聖水で心臓を洗滌した」とする記述がハディースに残されている。ムスリム『サヒーフ』、1巻125頁～129頁。Cf. Murata, p. 325. この啓示、昇天、開胸における天使の上昇、下降は、神と人間における垂直関係を明示するものであり、また、天使の仲介性を示すものとも理解されている。Cf., Murata, p. 325.
- 11) 『コーラン』18章49節、81章10節、86章4節、参照。最後の審判において、天使が記録した帳簿に基づいて現世での行為の総体が裁かれるとされる。この帳簿天使 (シジッル) は『驚異』においては2人、あるいは3人とする説が紹介されている。Hees, pp. 67–77; Suyūṭī (Burge), pp. 159 (No. 312)–174 (No. 406). 最後の審判後、天国入りした者は天女 (hūrī) に傳かれ、他方、地獄 (火獄) に落とされた者は、地獄の天使、ザッパニーヤの懲罰を受けるとされている。また、審判以前に、墓中で、ムンカルとナキールの2天使の尋問を受けるとされている。Cf. Burge, pp. 44-55.
 - 12) Webb, p. 245.
 - 13) Burge, p. 88.
 - 14) 『コーラン』に基づく天使像は竹下が概観している。竹下、219頁～231頁。『コーラン』には出てこないが、ムスリムの信仰や思考において重要性を持つのが、イスラーフィール (復活時にラッパを吹き鳴らす)、ムンカルとナキール (墓中の懲罰天使)、リドワーン (天国の番人)、であり、リドワーンは固有名と解されている。これらの天使はカズウィーニー『驚異』において詳述されている。Chipman, p. 431; Murata, p. 325; *EI*, s.v. Ridwān (W. Raven) ; Burge, p. 7.
 - 15) Burgeは「コーラン注釈書」における天使像の付加、肥大、の一例として、天使が有するとされる羽根の枚数の増加を挙げる。Burge, pp. 57–58.
 - 16) nafsとrūhの異同に関しては、*EI*, s. v. Nafs (E. E. Calverley & I. R. Netton) ; Macdonald, 参照。そこでは『コーラン』においてナフスとルーフは各々5種の意味が重層的に用いられており、天使の総称や人間、また人の魂を指すことはない結論づけている。また、ナフスとルーフは一般的に霊と靈魂と訳し分けられているが、この2語の各指示対象を明確にすることは難かしく、著述者によってその用法が異なる。ガザーリーは「人間の本質部分である靈魂 (ナフス) – 彼はこれを心 (カルブ) と、霊 (ルーフ) とも呼んでいる」と指摘されている。Cf. Burge, p. 270, fn 202. 中村、124頁、参照。
 - 17) 本稿でいう「宇宙論」は自然科学で扱う自然現象としての宇宙の動きを対象とするのではなく、「現象界と霊的世界 (不可視界、天使、中間世界) という二つの世界全体についての宗教的かつ包含的な議論、一種の存在論を意味する」。青柳、5頁。Cf. Macdonald, p. 316. この意味でのイスラーム宇宙論は矢島・矢島訳が概観しているし、詳細はNasr参照。そこではイブン・スィーナー、イフワーン・アッサファールの宇宙論が述べられている。Cf., Nasr. その代表的な著作であるス्यूティー『天体の形状と配置』はハイネンの翻訳・研究がある。Cf., Heinen. Cf. *EQ*, s. v. Cosmology (Angelika Neuwirth) ; Berlekamp, pp. 133–134.
 - 18) 神との見神を修行の究極目的とするスーフィーたちは、その意味において天使の存在に関心を有していた。Cf. *EI*, s. v. Ṭaṣawwuf (W. C. Chittick). 天使と人間、あるいは預言者、の何れが優位にあるのか

- の神学者間の議論は、Webb; Ibrahīm、参照。スーフィーたちは、人間の創造に際し跪拝を拒んだイブリースを、神のみを崇拜する存在として重視する傾向にあった。スーフィズムにおけるイブリース研究はアウンが行い、彼は、イブリースはスーフィー独特の題材であり、その解明はスーフィズム全般の理解に資すると説く。Awn, p. 5; *EQ*, s. v. Creation (D. C. Peterson); Burge, p. 8, p. 10,
- 19) 矢島・矢島、151頁、青柳、114頁～117頁、参照。
- 20) 『コーラン』15章16節～18節。また同15章26節、27節、55章15節の記述から、天使が光から、人間が陶土、あるいは黒泥から作られたとされるのに対して、ジンは火あるいは火災から作られたとされる。「たとえ人間とジンとが一致して、このコーランに似たものを造りだそうとしても」(17章88節)とあるように、人間に取り憑き悪に誘い込むとされている。Cf, *EI*, s. v. Djinn (D. B. Macdonald – [H. Massé]; *DI*, s. v. Genii; *EQ*, s. v. Cosmology (A. Neuwirth).
- 21) Cf, *EI*, Malā'ika (D. B. Macdonald).
- 22) 矢島・矢島、153頁、参照。Cf, Porter, pp. 65-66. 辞典、「スイドラ」(山中由里子)、
- 23) 本注(105)参照。『驚異』でカルービッユーンとして表されている天使で、ユダヤ・キリスト教のケルビムに相当すると考えられている。Suyūṭī (Burge), p. 104.『驚異』「カルービッユーン」の項参照。Cf., *EQ*, s. v. Angel (G. Webb).
- 24) 「たとえばわれらが彼を天使にしたとしても、やはり人の姿にするはずだから」(6-9)や「天使たちを見るその当日には、罪を犯した者どもにはいかなる吉報もない」(25-22)とあるように、天使たちは人の姿で人間の前に現れる時があると考えられる。
- 25) イブリースがはたして天使に属するのか、あるいはシャイターン一族か、とイブリースとジンの関係に関しては諸説あり、定説はない。最も明解な説は、神の命令に背く以前はイブリースという固有名であり、その反抗ゆえに人間に対する誘惑者となってからはシャイターンという集団名が付与されたとするコーラン注釈者、バイダーウィーの説である。そして、「イブリースは固有名詞である。シャイターン(悪魔)は一般名詞でイブリースは悪魔の祖であると考えられる。、(シャイターンは)種別としては「ジン」に区分される」、という解釈が広く理解されているところであろう。小杉、151頁～152頁。本注(20)参照。Cf, *EI*, s. v. Djinn (D. B. Macdonald- [H. Massé]); *DI*, s. v. Genii. 竹下、55頁。
- 26) Burge, p. 177, p. 183.
- 27) 竹下、219頁～231頁。中村はガザリー宇宙論を論じ、その主要概念であるムルク、マラクート、ジャバルートの意味内容を明らかにしたが、ガザリーは「現象界の背後に、肉眼では見えず、心の目(baṣīrah)でしか知り得ない神秘の世界、神霊と天使の世界があり、ガザリーはこれを『マラクートの世界』(ālam al-malakūt)と呼ぶ」と分析している。中村、103頁。また青柳はガザリーとラーズィーの宇宙論を扱う論文で天使に言及している。青柳、第6章、第7章。
- 28) トゥーサーの『被造物の驚異と万物の珍奇』は守川らのベルシャ語百科全書研究会によって日本語訳が継続発表中である。同書の位置付けや、同書とカズウィーニーの同名書との比較は守川が簡潔に行っている。守川(2009)、198頁～202頁。Cf, Hees, pp. 77-99; Berlekamp, pp. 25-26.
- 29) Berlekamp, pp. 7-8, p. 27; Hees, p. 93.
- 30) Cf, Chipman, p. 33; Burge, p. 7. ハディースの原義は「語り」「話し」であるが、狭義の専門用語として「ムハンマドの言行の伝承記録」を指し、『コーラン』に次ぐ権威あるものと見なされている。各ハディースは伝承経路(イスナード)と伝承内容(マトン)から成り、伝承者の証言能力を精査する「人間学(イルム・アッリジャール)」というイスラーム独特の学問分野が生まれた。Cf., *EI*, s. v. Ridjāl (G. H. A. Juynboll).
- 31) タフスィールは『コーラン』の章句の「解説書」を指し、難解句、両義的な語句、等に注釈を施した著作。初期の代表的ものにタバリー(923年没)の『集成・章句解釈の全解明』があり、他方、文法的解釈

- を主とする代表的な著作にザマフシャリー（1144年没）の『啓示の真理開示（al-Kashshaf）』が指摘される。参照、辞典、「タフスィール学」（小杉泰）。
- 32) ターリーフは一般に「歴史」や「歴史書」を指すが、本稿においてはムハンマドの伝記（スィーラ）や彼の行った遠征・戦闘記録（マガーズィー）が含まれる。辞典、『スィーラ』（医王秀行）、参照。「諸預言者伝（qīṣaṣ al-anbiyā'）」は前イスラーム期の諸預言者の活動を記したもので、キサーイーやサウラビーの同名書が著名。Cf., Chipman; *EI*, s. v. al-Kisā'ī (T. Nagel); *ibid.*, s. v. Tha'labī (A. Rippen).
- 33) Murata, pp. 328-329; Burge, p. 99; Berlekamp, p. 16; Nasr, pp. 236 – 281. 中村「イブン＝シーナーの創造論」、183頁～202頁。
- 34) 中村「ガザーリーの宇宙論」、100頁～121頁、青柳、137頁～152頁。
- 35) アンダルシアの神学者で神秘主義者、大部な主著『メッカ啓示』において各所で天使に言及し、また『靱智の台座』、等の著作で天使を論じる。Murata, pp. 341 – 342; Burge, p. 8; Webb, p. 246, fn 7. ウエップはイブン・アラビーの天使論を、①一者からの流出を論じる著作、②人間の創造の役割を言及する著作、③天使、あるいは天使様の存在の現出の記述、に3分類して論じている。Webb, p. 245.
- 36) Cf, Murata, p. 329-330. Burge, p. 8, pp. 99 – 100.
- 37) 純正同朋団（Ikhwān al-safā' wa Khullān al-wafā'）の訳を与えられる団体は、10世紀にバスラで活動した秘密結社で、イスマーイル派との関係が指摘されているが、その活動内容や構成員を含めて詳細は不明である。彼らが著したとされる「書簡論文（Risāla）」は包含的な内容の百科全書的著作とされ、かれらの究極的目的である「靈魂の救済」を実現させるためのガイドブックと解されている。岡崎（2011年）、68頁～73頁、参照。『驚異』とイフワーンの関係は、Berlekamp, pp. 50 – 51, 参照。
- 38) 同書の著述意図と同書のイスラーム天使論における意義は、Burge, pp. 111-112, 参照。そこでBurgeは、スユーティーはハディースにいかなる解釈や個人的見解を述べることなく、それらはハディースの取舍選択とその配置で示されるのみだと結論付ける。
- 39) Al-Maqdisī（900年？没）、歴史書『始源と歴史の書（Kitāb al-bad' wa-t-tārikh）』、ムウタジラ派に属し、神の創造に始まる歴史書を著し、天の書板、筆、玉座、台座、の記述から、玉座を支える天使に始まり他の天使に言及している。マスウディーの『黄金牧場』に比肩する百科全書の史書と見なされている。Cf, *EI*, s. v. al-Muṭaḥhar b. Ṭāhir Maḳdisī (Ed.) ; Hees, pp. 258-259; Chipman, p. 432.
- 40) 『赦しの書簡』の主人公、イブン・アル＝カーリフはジンと出会い、その詩を聞かされる。Ma'arri, pp. 127 – 135; Monteil (tr.), pp. 135 – 142. ジンと詩霊との関係は、岡崎（2006）、参照。
- 41) 『驚異』の評価は以下の資料を参照。*EI*, s. v. Ḳazwīnī (T. Lewicki) ; Berlekamp, pp. 7 – 8, pp. 22 – 23; Burge, pp. 351 – 358; Hees, pp. 91 – 92.
- 42) カズウィーニーに関する基本事項は、*EI*, s. v. al-Ḳazwīnī (T. Lewicki) ; Hees, pp. 1 – 99; Berlekamp, pp. 11 – 20, 参照。
- 43) Cf, Hees, pp. 104 – 109. イスラーム文化圏における百科全書の機能、意義は以下の文献参照。*EAL*, s. v. Encyclopaedias, medieval (H. Kilpatrick) ; *EI*, s. v. Mausū'a (Ch. Pellat) ; 岡崎（2011年）。また、ワースイト本の評価は、Berlekamp, p. 27; Heese, pp. 97 – 114, 参照。この1280年筆写本をカズウィーニーは教授に使用したと推測する研究者もいる。Berlekamp, p. 174.
- 44) Burge, p. 65, p. 125.
- 45) Hees, p. 99, p. 109, p. 329, p. 337, p. 338. .
- 46) *Ibid.*, p. 91, fn 2.
- 47) ワースイト本の写本情報は、*Ibid.*, p. 93, fn. 15, p. 95; Berlekamp, p. 186, fn 10.
- 48) Berlekamp, p. 15, p. 27, p. 39.
- 49) Hees, p. 83, p. 85, p. 93.

- 50) ヘースはワースイト写本の動物と天使を扱う部分を校訂し、独訳、注解しているが、天使の項では、イズラーイール以下の部分は省略されている。Hees, p. 332.
- 51) Wüstenfeldはカズウィーニーの2著作である『驚異』と『諸国の遺跡と信者の情報』をともに編集して、Kosmographieと題して出版し、Ethéもその独訳本のタイトルに使用。Cf. Berlekamp, pp. 8–9; Ethé.『驚異』の内容構成や宇宙構造に関し、ヘースはその全体構造を図示している。Hees, p. 101.
- 52) 『驚異』の序文の意味とその訳は、Berlekamp, p. 22、参照。
- 53) Berlekamp, pp. 40–46; Hees, p. 98.
- 54) Berlekamp, p. 23; Hees, p. 99, fn 47; Zadeh, p. 38, p. 40.
- 55) 『コーラン』の本文は章(sūra)と節(ʿāya)とから成り立っているが、後者は「徴」を意味する。つまり、「(これは)われら(アッラー)が下し、定めとして課した一章(スーラ)である。おまえたちが反省すればとて、その中にわれらは明らかな徴(アーヤ)を下した」(24–1)とあるように、啓示の文言がすなわち神の実在の「徴」であり、その語が同時に「節」を表す語として用いられている。また、『驚異』の冒頭で述べられているごとく、自然の驚異もまた神の存在と権能を示す証である。『コーラン』30章24節。Cf., *El*, s. v. Āya (A. Jeffery); *EQ*, s. v. Signs (Binyamin Abrahamov); *ibid.*, s. v. Cosmology (Angelica Neuwirth), p. 441; *ibid.*, s. v. Creation (D. C. Peterson), p. 474.
- 56) Berlekamp, pp. 10–11, p. 17, p. 25.
- 57) Berlekamp, p. 23; Zadeh, pp. 35–36.
- 58) イスラームにおいては預言者が行う奇蹟(muʿjiza)と聖者が行う奇蹟(karāma)とを峻別する。前者は神による預言者性の証明であり、後者は聖者に対する神の恩寵とされる。この点で、ムハンマドの奇蹟は預言を除けば、昇天等の事象に限られており、キリスト教におけるイエスと明白な対照をなす。この事実から、ムハンマドはキリスト教におけるイエスと対比されるべき存在ではないと主張される。辞典、「奇蹟」(齊藤剛)、同「イーサー」(小杉泰)。
- 59) 辞典、「原因論」(仁子寿晴)、同「原子論」(中村廣治郎)、参照。
- 60) 中村、238頁。Cf. *El*, s. v. Djins (S. van Den Bergh)。
- 61) Cf. *El*, s. v. Tawhid (D. Gimaret); Berlekamp, p. 15. 辞典、「タウヒード」(竹下政孝)、同「存在一性論」(東長靖)、参照。
- 62) 天使の組成について、ムハンマドの妻アーイシャは、「預言者は『天使は光(nūr)から、ジン(dhānn)は火(nār)、そしてアダムは陶土から作られた』と言われた」と伝えている。Murata, p. 338. jawharに關しては、*El*, s. v. Djawhar (S. van den Bergh)、参照。また、『驚異』のこの箇所の解釈については、Hees, p. 265, fn. 63, p. 268, fn. 75; Burge, pp. 98–102, 参照。
- 63) nutqは「言語能力」を指し「理性・知性(ʿaql)」と通底する意味を有する。Hees, p. 265, fn. 64. 天使は知性から造られていて欲望(shahwa)を持たず、動物は欲望から造られていて知性は無く、人間は知性と欲望とから造られている。それゆえ、人間の知性が欲望に勝つと、人は天使より優れるが、欲望が知性を打ち負かすと人は獣に劣る」とのハディースがある。Murata, p. 340.
- 64) 無謬性(ʿisma)に関し、天使同様、預言者ムハンマドは罪を犯すのか否かは、神学上の重要な問題であり、ムウタズィラ派の問題提起以後、諸種の論議が交わされている。また、ムハンマドとイマームを共に無謬とするシーア派の考えの根底をなす。辞典、「無謬性」(菊池達也)、参照。Cf. *El*, s. v. ʿAḳīda (W. M. Watt)。
- 65) 肉体を持たない天使は食べも、飲みもしないと考えられている。Cf. *El*, s. v. Malāʾika (M. Macdonald); Hees, p. 272.
- 66) 語根「aṭṭa」。Hees, p. 265, fn. 67; Burge, p. 263, fn. 34. 天上界では天使の祈りの声で満ち溢れているとするハディースが残されている。Suyūṭī (Burge), p. 115, No. 10.

- 67) 「真空への恐怖 (horror vacui)」に関しては、Hees, p. 273、参照。
- 68) プラトンの「洞窟の比喩」を想起させる表現であり、またコスモスとマクロコスモスの照応という基本的な思想の表明でもあり、純正同胞団 (イフワーン・アッサファール) の「書簡集 (Rasā'il)」の影響が窺える。Cf, Hees, p. 274.
- 69) 全存在物に天使が関与していることは、『驚異』天使論の最後で詳述されている。本訳、15頁参照。Cf, Murata, p. 332; *EI*, s.v. Djins (S. van den Bergh).
- 70) 同様のハディースがSuyūṭī (Burge), p. 146, No. 191, No. 192, No. 193 に採録されている。この4種の生き物の記述は『旧約聖書』エゼキエル書と近似している。『天使百科事典』、「エゼキエル」。Cf, Hees, pp. 281–286.
- 71) 前イスラーム期 (jāhiliyya) の詩人で、キリスト教徒であったが、やがてイスラームに改宗した。Cf, *EAL*, s. v. Umayya ibn Abī al-Ṣalt (T. Bauer) ; Hees, pp. 284–286.
- 72) (686年 or 688年没)「コーラン注釈の父」であり、al-Ḥibr (博学者, the doctor) とか、al-Bahr (海、博識) と渾名された。Hees, 286; *EI*, s. v. 'Abd Allāh b. Al-'Abbās (L. Vecchia Vaglieri).
- 73) 『コーラン』では「終末の日」には様々な呼称が付けられている。最も頻繁に用いられるのが「甦りの日 (yawm al-qiyāma)」であり、次いで「審判の日 (yawm al-dīn)」 「最後の日 (al-yawm al-ākhir)」であり、単に「その時 (al-sā'a)」という表現が用いられることもある。Cf, *EQ*, s. v. Last Judgement (Isaac Hasson).
- 74) Cf, Hees, p. 286. イスラーム天使論における「天使の巨大さ」に関しては、Burge, pp. 60–63、参照。
- 75) 天使や預言者の執り成しは、『コーラン』6–51で否定。しかし、21–26~28; 53–26で天使による執り成しを有効とする記述がある。また最後の審判時における神の使徒 (ムハンマド) による執り成しの有効性に関しても諸説あり、一致した見解はない。Cf, *EI*, Shafā'a (A. J. Wensinck – [D. Gimaret]). 参照、ムスリム『サヒーフ』、「執り成し役と信者の救済について」、1巻151頁～152頁、「天国での最初の執り成し後、預言者ムハンマドの言葉について」、1巻170頁～171頁、「預言者が特別祈願を執り成しのため残したことにに関して」、1巻171頁～173頁。
- 76) 「その日には精霊 (al-rūh) と天使たち (al-malā'ika) は位階 (ṣaff) に分かれて立つ」(78–38)。ムラタは「全ての天使はこの聖霊の支配下にあり、それは創造原理 (the Creative Principle) である」と説く。Murata, p. 327. また「天使たちを、二対、三対、または四対の翼をもつ使者となし」(35–1)の文言は、各天使の機能や義務を表していると解釈されている。Cf., *EQ*, s. v. Angel (G. Webb).
- 77) 「al-Rūh」は『コーラン』においてはジブリールと同一視されることがある。(70章4節)。本注(85)参照。また97章4節には「この夜、もろもろの天使と聖霊とは」とあり、さらに、「霊と天使たちが一列に並ぶとき」(78章38節)の文言もあり、(聖)霊、天使、ジブリールは明瞭に判別するのは難しい。Cf, Hees, pp. 291–296. Suyūṭī (Burge), pp.149-151, No. 210–228. *Ibid.*, p. 276, fn 332, fn 342.
- 78) アッラーは聖霊天使に被造物の一切を託した、とするカズウィーニーの説明は、イスラーム天使論において革新的な解釈である、とヘースは説き、純正同胞団からの直接的な影響を指摘する。Hees, p. 296.
- 79) イスラフィールはヘブライ語の「Serāfim (熾天使)」よりの派生語だと解されている。Cf, *EI*, s. v. Isrāfīl (A. J. Wensinck). 『天使百科事典』、「熾天使」、参照。
- 80) 名高いコーラン注釈者。767年没。Cf, *EI*, s.v. Muḥāṭil (A. Rippen).
- 81) ここで示されているように、イスラフィールが奏するのはqarn (角笛) かṣūr, nāqūr (ラッパ) の何れかに関して議論されている。Cf, Hees, pp. 301–302. 『コーラン』では終末の刻を告げるのはal-ṣūr (39章68節、69章13節), al-nāqūr (74章8節) とされている。Cf, *EQ*, s. v. Eschatology (Jane I. Smith) ; Burge, p. 268, fn 148., p. 269, fn 165. また吹き鳴らす回数に関しても議論されている。Cf, *EQ*, s. v. Last Judgement

- (Isaac Hasson). そして、「ラッパの天使」の存在を伝えるハディースがあるが、この天使は明らかにイスラフィールではない。Suyūṭī (Burge), p. 130, No. 92; p. 269, fn 173.
- 82) イエメン出身のユダヤ人で後にイスラームに改宗。聖書や南アラビアの古伝承に精通し、博学で知られ、ラビに次ぐと位階とされている「Hibr, Habr」の尊称を持つ。652年頃死去。Cf, *EI*, s. v. Ka'ab Al-Ahbār (M. Schmitz).
- 83) *EQ*, s. v. Heavenly Book (R. Wisnovsky); *ibid*, Preserved Tablet (D. A. Madigan). 「本の母 (umm al-kitāb)」、「隠された本 (kitāb maknūn)」、「守られた書板 (lawh mahfūz)」と呼ばれており、玉座の右、あるいはその下部、または、『驚異』が描くように、天使、イスラフィールの額にあると信じられている。書板の表紙は白真珠や黒や赤の宝石で作られており、その周りを天使が監視し続けている。大川 (2009) が専著として、書版にまつわる諸問題を取り扱う。
- 84) 啓示をもたらす天使として重要な存在であるが、『コーラン』には3箇所ではか名が挙げられていない。(2-97, 98, 66-4)。Cf, *EI*, s. v. Djabrā'il (J. Pedersen); *EQ*, s. v. Gabriel (Gisela Webb).
- 85) 『コーラン』26章193節では「誠実な霊 (al-rūh al-amīn)」の表現が、また16章102節では「聖霊 (rūh al-qudus)」の表現が使われている。また「啓示の主 (ṣāhib al-wahy)」と呼ばれることもある。Cf, Hees, p. 308, fn 272.
- 86) 「nāmūs」は多様な意味を持つが、秘義、秘匿の他に「親友」の意味を持ち、啓示に関わる天使とされる。Cf, Hees, p. 309, fn 276, 277.
- 87) 『驚異』では優美な色彩を帯びた最高に美しい鳥とされている。München, Cod. Arab. 464, Fol. 192r. 他の並行資料がなく、カズウィーニー独自の描写と思われる。Cf, Hees, p. 316; *EI*, s. v. Ṭāwūs (F. Viré).
- 88) マディーナ郊外にある墓地で、当地最古の墓地と考えられている。Cf, *EI*, s. v. Bakī' al-Gharkad (A. J. Wensinck, [-A. A. Bazmee Ansari]). ムハンマドの妻アイシャは、預言者は深夜バキーイの墓に出かけて死者への執り成しを求めたと伝えている。Cf, *EI*, s. v. Shafā'a (A. J. Wensinck - [D. Gimaret]).
- 89) ムハンマドがジブリールと考えられている天使や使徒を目撃した記述は、『コーラン』53-6-9、同13-14, 81-23, にある。また失神したとのハディースは、Suyūṭī (Burge), p. 122, No. 52, No. 53, 参照。
- 90) 「小鳥 (waṣ')」に関しては、Hees, p. 313, fn 313, 参照。Cf, Lane, q. v. 「uṣfūr」, vol. 2, pp. 2064-2065. ここでは「天国のツバメ (uṣfūr al-janna)」の用例が挙げられている。また『コーラン』では小ささの象徴としてブヨ (蚊) (2章26節)、ハエ (22章73節) やアリ (第27章)、塵 (10章61節, 99章7-8節) が用いられる。またハディースにおいても、「天使は一匹のハエよりも小さい」、「蚊の魂を取り去る」、や「ガブリエルは小鳥 (al-hūda) のように小さくなった」、という文言が残されている。Suyūṭī (Burge), p. 115, No. 5; p. 135, No. 119; p. 153, No. 237. Cf, Burge, p. 263, fn 31. 『驚異』においても次項「ミーカーイール」において、「諸天は海の中のケシ粒ほどになる」で微小さを表している。
- 91) 天使と翼の関係は、Burge, pp. 57-58; Hees, p. 313, p. 315 参照。
- 92) 『コーラン』15章59節-77節、26章168節-171節、29章32節-35節。
- 93) 天上界には「鵝鳴天使 (al-Dik)」がいるとされており、夜明けあるいは礼拝時に鳴き声を上げる。Cf, Suyūṭī (Burge), p. 188, No. 280 - p. 189, No. 294.
- 94) 『コーラン』2章98節に、「神と、その天使たちと、その使徒たちと、ガブリエルとミカエルとの敵となる者はだれか」との記述がある。ミーカーイール (ミカエル) はユダヤ人の守護天使であり、カトリック教会では「天使長」とされているが、カズウィーニーの『驚異』においては記述の少なさが際立っており、イスラーム独自の天使論の一例と見なせるだろう。ここで記述されているように「糧の天使 (malaku r-rizq, ṣāhibu r-rizq)」とされ、地獄が造られてから笑わないと信じられている。Cf, Suyūṭī (Burge), p. 127, No. 79. また全ての自然現象に天使が関わっていることが示されており、自然現象は神の威力 (quwwa) の顕現とする思想がここで現わされている。Cf, *EI*, s. v. Mikāl (A. J. Wensinck); Hees, p. 319.

- 95) イズラーイールは『コーラン』では固有名としては名が挙がっていないが、6章61節、32章11節、79章1節～5節で「死の天使 (malak al-mawt)」が記されている。そして、マクディスィー、ラーズィー、クルトゥビー等一致して、死の天使 (イズラーイール)、ジブリール、ミーカーイール、イスラーフィール、を四大天使 (ru'asā'u l-malā'ika) としている。Cf, *EI*, s. v. 'Izrā'il (A. J. Wensinck) ; Hees, p. 328, fn 353.
- 96) 『コーラン』4章125節に「宗教ということになれば、善行にはげみ、自分の行動を神にゆだね、純正の信者アブラハムの教えに従うものにだれがまさるであろうか。神はアブラハムを友となしたもうた」、と記されている。
- 97) *Suyūṭī* (Burge), p. 135, No. 121; p. 136, No. 123. 見張りの天使は『コーラン』、6-61、13-11。
- 98) 『驚異』でも名前が挙がっているイブン・アッバースやカアブ・アルアフバルと同様、イスラーム初期の伝承学者で732年没。Cf, Hees, p. 330, fn 372.
- 99) スライマーン (ソロモン) は叡智と超能力の所有者と理解されており、『コーラン』21章79節、27章16節～44節、34章12節～13節、でその姿が描かれている。またスライマーンが死の天使の姿を見て失神する場面は、『驚異』「ジブリール」の項において、預言者ムハンマドがジブリールの真の姿を見て失神する光景と通底する。
- 100) 大川はLaneの著作を引いて「運命の書き換え」を説明している。大川 (2004)、157頁～162頁。*Suyūṭī* (Burge), p. 139, No. 143.
- 101) タウヒードは「神の唯一性」を指し、「タウヒードの徒」はムスリムの別称として用いられる。参照、本注 (61)。
- 102) イッリーーン、シッジーンの話は、それぞれ『コーラン』83章18節～20節、同7節～9節、で説明されている。シッジーンは原義は「監禁場所」だが、牢獄や地獄を含意する。Cf, Hees, p. 331. 「放蕩者の記録はシッジーンの中に保管される、敬虔な者はイッリーーンに保管」。大川 (2009)、53頁、参照。
- 103) 平行ハディースは、*Suyūṭī* (Burge), p. 143, No. 167, No. 168.
- 104) 慈悲は神 (アッラー) の根源的な本性であり、「慈愛あまねき者 (al-Rahmān)」や「慈悲深き方 (al-Rahīm)」の美称を持つ。参照、辞典、「アッラー」(小杉泰)、同、「慈悲」(小田淑子)。
- 105) 「天使には10種類あって、その内の9種はケルビムであり、日夜倦むことなく神を賛美しており、残る1種の天使は隠されたすべての物に責任を負っている」とするハディースがある。*Suyūṭī* (Burge), p. 117, No. 21, No. 22, No. 23. p. 201, No. 490. カルービューンはユダヤ教における「智天使 (cherub, pl. cherubim)」に相当すると考えられている。「エゼキエル書」1章4節～28節では、神の玉座を運び、人、ウシ、ライオン、ワシの4つの顔を持つとされる。『驚異』「玉座の保持者」の記述、並びに本注 (70) 参照。『天使百科事典』「智天使」参照。
- 106) 平行するハディースは、*Suyūṭī* (Burge), p. 116, No. 11. Cf, *ibid.*, p. 272, fn 241.
- 107) イスマーイールを第2天の天使とするハディースもある。*Suyūṭī* (Burge), p. 187, No. 269.
- 108) 死者がこの世に戻るのを妨げる「障壁 (barzakh)」があるとされ、ここからキリスト教でいう「煉獄」の概念が派生したと考えられている。Cf, *EI*, s. v. Barzakh (B. Carra de Vaux). 参照、辞典、「バルザフ」(鎌田繁)、事典、「煉獄」(池上俊一)。また第7天上は光で満ち溢れ、ここを遮る幕を託されている天使は「メタトロン (Miṭāṭrūsh)」とするハディースがある。*Suyūṭī* (Burge), p. 185, No. 178. 参照、『天使百科事典』「メタトロン」。
- 109) 「戻る (taba)」を原義とし、「(神の許に罪から) 立ち返る」を意味するようになり、自らの罪を悔い改める改悛、悔悟を指す。そして神は自らを「悔悟の受諾者」とであると認める。『コーラン』9章104節、42章25節、66章8節。Cf, *EQ*, s. v. Repentance and Penance (Uri Rubin). 参照、辞典、「タウバ」(矢島羊一)。
- 110) 記録天使の役割と運命の書き換えに関しては、大川 (2004)、152頁～157頁、参照。

- 111) 平行ハデースは、Suyūṭī (Burge), p. 169, No. 378。
- 112) 日夜で監視の役目を「交代、引き継ぐ (ta'aqqaba)」ところからその名が由来する。Cf, Suyūṭī (Burge), pp. 159 – 174.
- 113) バラカは「(神の) 聖なる力、恵み」を指し、豊穡、祝福、幸福、等の広汎な概念を含み、『コーラン』では常に複数形 (barakāt) で用いられる。Cf, *EI*, Baraka (G. S. Colin). 参照、辞典、「バラカ」(私市正年)。
- 114) ムンカルとナキールの呼称についてはMargoliouth, 参照。同論文では、Jālūt, Yājūj, Mājūjを挙げて、預言者は「fā'ūl」形を好む傾向にあると指摘する。Cf, *EI*, s. v. Munkar wa-Nakīr (J. Wensinck). 平行するハデースは、Suyūṭī (Burge), pp. 190 – 192.
- 115) 「思い出す (dhikr)」を原義とし、「(神の名を) 想起する」に転じ、礼拝時に神の名を唱えて神を賛美することを意味し、祈祷の一部とされた。その意義や具体的な所作はムスリム『サヒーフ』、第3巻、595頁～626頁、「ズィクルの書」、参照。参照、辞典、「ズィクル」(川本正知)。『驚異』で描かれているように、「神の祈念 (ズィクル)」と天使の見守り、神の恵み (バラカ) の付与はムスリムの信仰において通底している。Cf, Burge, p. 180.
- 116) 「al-nār」の原意は「火」であるが、この個所ではいわゆる「火獄」を指す。地獄に関しては様々な語、表現が用いられるが、詳細は、*EQ*, s. v. Hell and Hellfire (R. W. Gwynne) ; *DI*, s. v. Hell.
- 117) janna、「楽園」のこと。楽園には門があり、それを守護する天使がいる。『コーラン』39章73節。Cf, *DI*, s. v. Paradise; *EI*, s. v. Djanna (L. Gardet).
- 118) Cf, *EI*, s. v. Hārūt wa-Mārūt (G. Vajda). スューティーはハールートとマールートに関するハデースを纏めている。Suyūṭī (Burge), p. 154, No. 248 – p. 159, No. 255. また同書に、ハールートとマールートを帳簿天使 (al-Sijill) の援助者とするハデースが収録されている。Ibid., p. 154, No. 247. Cf, *ibid.*, p. 278, fn 390.
- 119) 『コーラン』19章56節～57節、21章85節、の2個所で名が挙げられているが、詳細は不明である。旧約聖書のエノクに該当するという意見もある。Cf, *EQ*, s. v. Idrīs (Yoram Erder). また、スューティーにハールートとマールートが地上に降り立ったのはイドリース (エノック) の時代であったとするハデースが収録されている。Suyūṭī (Burge), p. 157, No. 254. そして、同書にイドリースと死の天使の会合が記されている。Ibid, p. 140, No, 149; p. 280, fn 421
- 120) 礼拝を有効なものとするための「清め」で、一定の所作が定められている。参照、辞典、「ウドゥー」(森伸生)。
- 121) 『コーラン』では火獄の処罰には「adhāba」の語が使われている。2章178節、5章36節、他。火獄における懲罰の肉体的な苛烈さは『コーラン』の各所で示されているが、その懲罰に終わりが無いことが一層処罰の厳しさを表す。『コーラン』20章74節、35章36節。Cf, *EQ*, s. v. Hell and Hellfire (R. W. Gwynne) ; *ibid*, s. v. Reward and Punishment (Wim Raven). 『驚異』の天使に関する挿絵中最も強い印象を与えるのが、当該個所での逆さ吊りにされているハールートとマールートの絵図である。彼らの頭髮は垂れ下がっているが、翼は上方に向けられたままの姿で描かれている。
- 122) 平行ハデースは、Suyūṭī (Burge), p. 173, No. 403. そこでは人間を付託されている天使の数は360となっている。
- 123) 「隠れている (物)」を原意とし、「現れている (物)」を意味するザーヒルと対称をなす。宗教用語としては、コーランの比喩的解釈から抽出された意味を指す。参照、辞典、「パーティン」(仁子寿晴)。
- 124) Cf, *EI*, s. v. Ghidhā' (M. Rodinson), ガザーリー著『宗教諸学の再興』の「食卓作法の書 (Kitāb ādāb al-akl)」を翻訳、解説した岡崎論文 (2012) 参照。Cf, Murata, p. 335; Jadaane, p. 52. ここで説明されている、人体に取り込まれた食物 (栄養物) が体内で栄養素へと変化し、身体の各器官へと変容する過程は、『コーラン』で説明される人間の創造過程と照応する。参照、『コーラン』18章37節、22章5節、23章

12節～14節、32章7～9節、他。Cf, *EQ*, s. v. Creation (D. C. Peterson).

125) カズウィーニーと哲学との関係は、Berlekamp, pp. 48-49 ; Hees, p. 255, pp. 344 – 346、参照

126) Berlekamp, pp. 21-22.

127) 参照、『天使百科事典』「ミカエル」。Cf, Burge, pp. 35 – 37, p. 51, p. 180.

128) *Ibid.*, p. 178.